

カベリ氷河からの
チョコリサ遠征記

—1980年6月～8月—

大阪外国語大学カラコルム学術登山遠征隊

後援 朝日新聞社 朝日放送



南面のかべり氷河からのチョゴリサ



ペースキャンプの隊員とポーター

大阪外国語大学山岳会チョゴリサ登山隊のチョゴリサ登頂は、あと一歩というところで挫折した。登山隊は、田村隊長以下素晴らしい登山経験の持主であり、長い間周到な準備を重ねて来た。我々は登頂成功の勝報が来ることを確信して疑わなかった。しかし、結局成功しなかった。隊員諸君の痛恨は想像に余りあるであろう。

彼らが登頂まであと一歩というところで、アメリカ隊遭難の消息に接したときの気持ちはどうであったろうか。自らの登頂を断念し、アメリカ隊の救援に向かったのは、恐らく咄嗟の判断に拠ったのであろう。しかし、それはまさに「真の勇氣」というべきものであって、我々は彼らの真の勇氣を讃えたいと思う。隊員のすべてはこの登頂に一切を賭けて長年の訓練と準備を重ね、また家族にもつらい思いをさせて来たはずである。そのすべてを断念してアメリカ隊の人々を救ったのである。

チョゴリサは逃げてはいかない。彼ら山男たちは、いつの日かまたチョゴリサに挑戦する機会を持つであろう。我々はそれに期待する。

最後に、このチョゴリサ登山隊を後援して下さった朝日新聞、朝日放送をはじめ、幾多の法人、個人、諸先輩方に対し、心よりの御礼を述べたい。

摩訶般若波羅蜜多心經
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
 蘊皆空度一切苦厄舍利子也不異空不
 異色色即是空空即是色受想行識亦復如
 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
 不增不減是故空中無色無受想行識無眼
 耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
 無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死
 亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無
 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
 罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
 想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
 多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
 咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
 多咒即說咒曰
 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑訶
 般若心經

登山隊の無事を願って畠中敏郎夫人が写経した般若心經

はじめに

総指揮 畠中 敏郎

昨夏挙行せられたカラコルム山脈のチョゴリサ峰登頂は、それより2年前に私の相談に与かった企てである。具体的にはガッシャーブルム諸峰を目標として準備が進み、不肖私はその総指揮に推された。自らの老軀と非力とに顧みて、責任の過大に私が逡巡したのはいうまでもない。しかし他にその人のにわかにも求むべくもない点から敢て引きうけた。その後、パキスタン政府の意向で目標の山が変更になった時には、なおさらこの計画の実行に支障を来たしはせぬかとひそかに危惧した。昨年5月に一行本隊の出発を成田空港に見送ってからは、その成功と安泰とを日夜念じて来たのはいうまでもない。

それが、今少しのところでは残念にも登頂は成らなかった一方で、自らの成功を捨ててもアメリカ隊員救助という人道的貢献を成しとげて、全員無事に帰国し得た折の感懐は、到底筆舌に尽しがたい。隊長、副隊長、全隊員の努力を賞し、その成果を心からことほぐ次第である。

一方、外大の特色として、山麓高地で学術調査をするのは私が早くから主張したところである。幸いに伊地智学長の熱意と文部省の許可とを得て、麻田夫妻が言語土俗の調査学習に見るべき成果を挙げたのは、錦上花を添えたものであった。

この遠征にあたって、物心両面において多大の援助に与かった大阪外国語大学、学術登山遠征隊後援会、同実行委員会の方々は勿論、大阪外語大卒業生各位そのほかに、改めて深甚な謝意を表す。

この報告書には、隊員諸君の反省や批判や将来の同種計画に対する忠告もいろいろと見られよう。これらを貴重な参考として第二第三の壮挙の成るのを念願するとともに、今回の総指揮としての不行届きを心から詫びる。

昭和56年10月2日

●目次

巻頭によせて…………… 5
 はじめに…………… 6
 入山交渉…………… 8
 遠征登山実現まで…………… 9
 遠征隊メンバー…………… 11

登山の部

ベース・キャンプへのキャラヴァン…………… 12
 ベース・キャンプからC3へ…………… 19
 C3より上部へ…………… 22
 遭難救助…………… 28
 救助・処置・移送…………… 30

<随想>

カメラで捉えたチョゴリサ…………… 34
 遠征記…………… 36
 視覚化を拒否する風景…………… 38
 アメリカからの来信…………… 40

学術の部

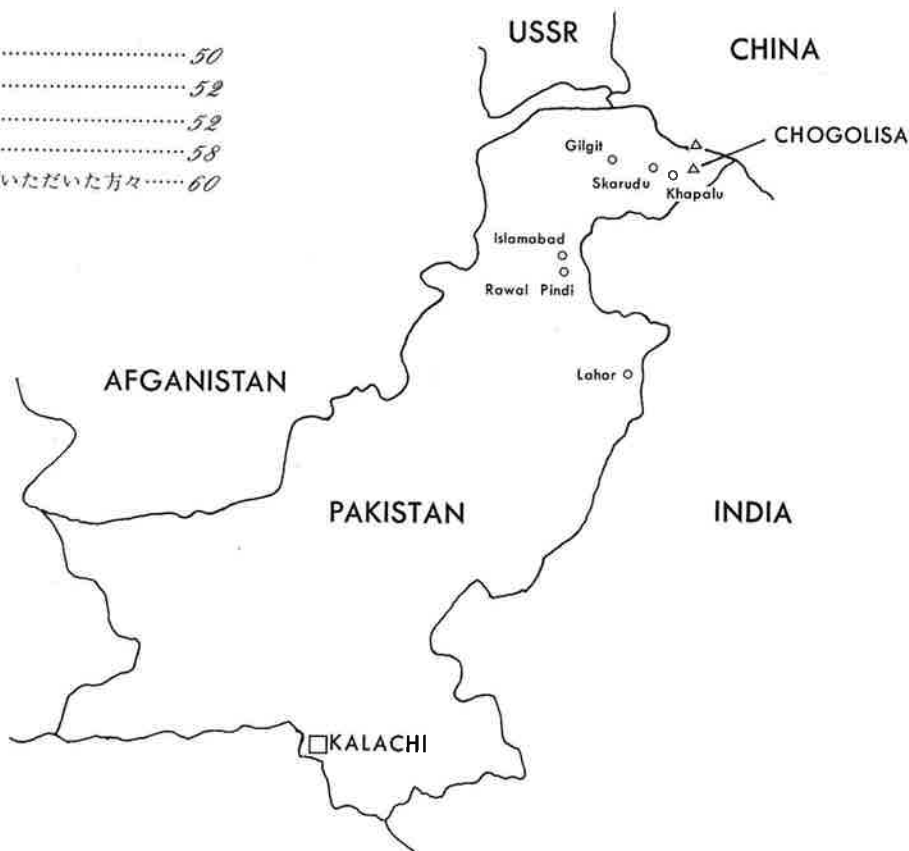
バルティ語基礎語彙…………… 41
 バルティスターン概要…………… 44
 バルティスターンの女たち…………… 47

資料の部

遠征の諸手続など…………… 50
 会計報告…………… 52
 装備…………… 52
 食料…………… 58
 ご協力及びご後援いただいた方々…………… 60
 あとがき
 Summary

行動日程

1980年
 5月5日 先発隊出発 北京經由ラワルピンディ
 12日 本隊出発 北京經由ラワルピンディ
 21日 ラワルピンディ→スカルド
 24日 スカルド→カバルー
 27日 カバルー→スルモ対岸
 28日 スルモ対岸→グルツェ
 29日 グルツェ→タガス
 30日 タガス→ブラコール
 31日 ブラコール→ラチェト
 6月1日 ラチェト→カルマディン
 2日 カルマディン
 3日 カルマディン→グロンジン
 4日 グロンジン→オーブチェン
 5日 オーブチェン→B.C.
 12日 C1建設
 15日 C2建設
 21日 C3建設
 29日 C4建設
 7月16日 C5建設
 19日 C4より頂上アタック
 19日 アメリカ隊事故 アタック断念し救助へ
 21日 アメリカ隊C4に到着
 24日 救助作業終了 C3へ
 25日 B.C.
 29日 カバルー
 30日 スカルド
 8月2日 ラワルピンディ帰着



入山交渉

実行委員長 高橋 洵

6月のラワルピンディは猛暑で寒暖計の目盛は夜になってようやく40度をやや下まわる程度であった。目標のガッシャーブルムII峰の登山許可の取得と、あわせて登山ルートの偵察を目的としてやって来た百瀬泰、船井総一と私の3人は先ず暑さと連続する下痢に参ってしまった。それでも政府当局の責任者であるアワン氏に3週間ねばって都合3回にわたり会見したが、「ガッシャーブルムII峰は外国隊を含め6隊の競願下にあり」、如何にしても登山許可の確約は引き出せなかった。さらにバルトロ氷河ルートを通っての偵察行も不可とのことで、ヒンドゥー・クシュ方面のトレッキングを許されたのみであった。

アワン氏はそれでも気の毒に思ったか、9月に入ってわざわざ在日パキスタン大使館を通じ、「ガッシャーブルムII峰並びに第二希望以下の山岳はいずれも登山許可できないが、代りの登山目標を至急再申請するように」と出状したのであったが、どうした手違いか我々がこれを入手したのは12月に入ってからであった。この時点からの再申請では翌春出発予定の我が隊のスケジュールからみると、大使館を通じての書類の往復では間に合いそうになく、我々は非常な苦境に陥ってしまった。代りの登山目標といっても限られた山岳で、それも必ず許可されるわけではなく、隊員の動揺は激しかった。我々としてはせめて日本人未踏の山が欲しかった。この困難を救ってくれたのが友人の在日パキスタン人ハミッド・ミール氏（絨毯輸入販売）である。同氏は我々の立場を深く理解すると共に、登山申請順に許可という原則からはずれた今回のパキスタン当局の措置に疑問を抱いて、大使館に事情問合せの後数回の国際電話を通じてアワン氏に直接かけ合ってくれた。その結果10日を経ずしてチョゴリサ南西峰の登山許可を取得できたのであった。ミール氏とは我々がラワルピンディ滞在中街頭で偶然知り合い、アワン氏との交渉にも一度立ち会ってもらったことから、以来懇親を深めたのである。同氏の知遇を得たのは全く我々の幸いでありその温かい配慮に深く感謝の意を表したい。

かくして第一難関の登山許可は取得できたが、チョゴリサ南西峰については文献資料が皆無の状態です文字通り未知への挑戦となった。

アワン氏は人格的にも優れた役人であるが、招かれた同氏の家でふと漏らした「多くの日本登山クラブが許可取得に押しかけてきたが、遠征が終ると挨拶もない」との不満には岳人として、また日本人として大いに反省を迫られる事実だと思ふ。

終りに皆さんにぜひお勧めしたいのが、北京よりタクラ・マカン砂漠上空を経てカラコルム-ヒンドゥー・クシュ山脈を越える飛行コースである。中近東、ヨーロッパ及びアフリカの諸都市へも、もちろんこのコースを取ることができる。これも地球の一部かと一驚し感激する大景観が眼下に静々として厳々として広がっている。

追記：百瀬、船井の両名はチトラール、マストゥージ、ギルギットコースのトレッキングを満喫して帰国した。

遠征登山実現まで

隊長 田村俊介

ヒマラヤ遠征登山計画は、1974年8月ソ連領パミールにあるレーニン峰のベース・キャンプで始まった。新潟大学山の会と大阪外大山岳会（会長・丸山忠雄教授）の合同登山隊の隊員としてレーニン峰遠征登山に参加していた由良薫、斉藤清雄、船井総一、私の4人は登山終了後、次回はヒマラヤの8000m峰に、できることなら外大山岳会の単独チームで行こうと話し合った。

中国領パミールや天山の山には、これらが未知の山である上、ソ連領パミールと連続した山域であるので最も興味があった。しかし前回ソ連領パミールに入山できるまでに、十数年の交渉期間を要している。今回も中国の山がいつ解禁になるかわからなかったので（1980年に一部解禁された）、確実に入山できるネパールまたはカラコルムの8000mの山に目標を絞ることにしたのである。

1974年のパミール遠征後、1976年には田中静哉も日本山岳会隊のパミール登山隊に参加して、コルジェネフスカヤ峰に登頂した。今回のチョゴリサ遠征には参加しなかった上島康嗣も田中と共に日本山岳会隊に参加し、コムニズム峰に登頂した。これで外大山岳会の会員がソ連領パミールの全7000m峰3座に登頂することができた。さらに1979年には山田昭一もソ連領カフカスのエリブルース山に出かけた。

これらの外大山岳会の海外登山の経験者が中心になって具体的に計画を練り、カラコルムのガッシャーブルムII峰を目標の山に選んだ。登山申請は1980年1月にパキスタン当局に他の登山団体に先がけて第一番に行った。またパミール以来縁のある新潟大学山の会からは、ドクター兼隊員として太田吉雄氏が参加してくれることになった。

大学の支援も決まり、伊地智善継学長も快く後援会会長を引き受けて下さった。山岳会名誉会長の畠中名誉教授も総指揮をとって下さった。朝日新聞、朝日放送にも後援を戴いた。遠征隊の実行委員長は高橋洵に頼み、事務所も利用させてもらった。

当学の特色を生かし、ぜひ言語学的調査も登山と併せて行いたかったので、ワールド語学科の講師麻田豊氏と夫人の美晴さんに参加してもらい、その方面での調査を依頼した。

1979年6月、高橋洵を団長に船井総一、百瀬泰が入山交渉にイスラマバードに出かけた。

だが最終的に許可が下りたのは、同じカラコルムであるが、チョゴリサ南西峰であった。それも出発の3ヵ月前、1980年2月のことである。関係者と打ち合わせた結果、やろうということになった。私の同級生の波多野哲朗も8ミリカメラの撮影に加わってくれた。

チョゴリサの登山の歴史を概観すれば大略次のようになる。

- (1)1892年コンウェイを隊長とするイギリス隊がバルトロ氷河に入り、現在のチョゴリサに最初「ブライド・ピーク」(花嫁の峰)という名を付けた。それはこの山が「ヴェールをかぶった花嫁」のように優美に見えたからであったと言われる。
- (2)1909年イタリアのアブルッツィ侯を隊長とする遠征隊がチョゴリサに挑み、東面の氷河より7500mまで達した。この高度は1922年イギリスのエヴェレスト遠征隊が8300mに達するまでの23年間最高到達地点として記録された。
- (3)1957年オーストリアの鉄人登山家ヘルマン・ブールが友人と2人で東面の氷河よりこの山に挑む。だが、ナンガ・パルバットとブロード・ピークの二つの8000mの覇者は、7100mの地点で雪庇を踏み抜き不帰の人となった。この悲劇は登山史上あまりにも有名である。
- (4)1958年桑原武夫を隊長とする京大隊は東面氷河より北東稜を通り、北東峰に初登頂する。
- (5)その後1975年オーストリア隊が南面のカベリ氷河から西稜を経て南西峰に初登頂。1976年西ドイツ隊が北面より北東峰に第2登を果した。

このようにチョゴリサは日本人が北東峰の初登頂を飾り、ネパール・ヒマラヤにおけるマナスルと同様、カラコルムにおける「日本人の山」とも言える山で、また、ヘルマン・ブールの眠る山としても、われわれに馴染み深い山であった。そのチョゴリサに日本隊として22年振りに挑戦することになり、南西峰登頂に成功すれば1000mに及ぶ頂上稜線の両端に日の丸が翻る事になるのである。

これまでに紹介されたチョゴリサの北面の山容は純白のウェディングドレスをまとった「花嫁の峰」であったが、我々の目指す南面はピラミッド状の岩壁が垂直に切り立った豪快な山谷で、まさに難攻不落の「城塞の峰」とも名付けることができた。

我々はこの南面のカベリ氷河上(約4500m)にBC(ベース・キャンプ)を設け、未踏の南稜または南壁から頂上を狙う。チョゴリサ南面には、わずかに1975年のオーストリア隊が入山したのみで、南壁・南稜に関する資料は皆無に等しく、資料の豊富な山と異なり我々自身でまずルート探しから始めなければならない。それだけにアルピニズムの原点に立ちかえった興味深い登山を実践することになる。

またチョゴリサの高度についていろいろな意見がある。ヘルマン・ブールや京都大学隊が挑戦した当時は、北東峰(当時7654m)が南西峰(当時7554m)より高いとされていた。しかし1968年にはディーレンフルト等により、南西峰(7665m)が北東峰(7654m)より高いとされた。その後1973年にはポーランドの登山家ワラーによっても南西峰(7654m)が北東峰(7640m)より高いとされた。これらが正しいとすれば南西峰がチョゴリサの最高点となる。そこで今回の登山では水準器で両峰の高低を頂上で測定することにした。

出発を直前に控えてからもいろいろ深刻な問題が生じた。各々の勤め先での難問、資金負担の問題、家庭の事情など、数え上げればきりが無い。だがこれらすべても何とか解決し、5月5日、船井、田中、麻田美晴の3人が先発隊として先発。5月12日には関係者の見送りを受けて本隊も成田空港よりパキスタン・ラワルピンディに向かって飛び立った。

遠征隊メンバー

総指揮 隊長	畠中敏郎 	大阪外国語大学山岳会名誉会長、大阪外国語大学名誉教授 1937年 兵庫県生まれ ロシア語学科卒 1964年 東京外国語大学ソ連邦言語・民俗調査団員でカフカス及びソ連ヨーロッパ部へ 1973年 カフカス、エリブルース周辺 1974年 新潟大学・大阪外国語大学バミール遠征隊、ゼネラルマネージャーでレーニン峰へ 1976年 国際岩登り競技会・日本山岳協会隊監督で西カフカスへ 川上貿易勤務 ☎03-665-2823 (社)日本山岳会理事、(社)日本山岳協会理事歴任 (住所) 〒180 武蔵野市吉祥寺東町3-23-8 ☎0422-21-2654
副隊長	斉藤清雄 	1941年 北海道生まれ インド・パキスタン語学科卒 1965年 表銀座縦走(11月) 1972年 鹿島槍ヶ岳北壁主稜(1月) 1973年 鹿島槍ヶ岳天狗尾根(12月) 1974年 新潟大学・大阪外国語大学バミール遠征隊、レーニン峰登頂CPC代表 ☎06-856-0075 (住所) 〒565 大阪府吹田市竹見台1-1C26-307 ☎06-833-9381
隊員 装備・学術	船井総一 	1950年 京都生まれ スペイン語学科卒 1970年 槍ヶ岳北鎌尾根-奥穂高(12月) 1971年 穂高岳屏風岩東壁(1月) 1973年 裏銀座縦走(1月) 1974年 新潟大学・大阪外国語大学バミール遠征隊、レーニン峰登頂 1979年 ラダック パルチャ・カンリ (住所) 〒272 千葉県市川市宮久保1-29-7 ☎0473-74-0335
隊員 マネージャー 輸送・梱包	山田昭一 	1950年 京都生まれ 中国語学科卒 1971年 鹿島槍ヶ岳天狗尾根(1月) 1975年 後立山不帰II峰東壁(11月) 1978年 北アルプス赤沢山槍沢針峰大スラブ(4月) 1979年 カフカス、エリブルース (株)パシフィック・プロダクツ勤務 ☎03-863-1501 (住所) 〒272 千葉県市川市八幡5-17-15 ☎0473-32-1930
隊員 食糧・学術	小林俊人 	1949年 神奈川県生まれ タイ語学科卒 1974年 槍ヶ岳(1月) 1976年 ハヶ岳大門沢奥壁-硫黄岳(5月) 1976年 北岳バットレス(11月) 1977年 甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣 東京銀行勤務 ☎03-734-2201 (住所) 〒284 千葉県印旛郡四街道町みそら3-25-17 ☎0434-32-3325
隊員 食糧・会計	田中静哉 	1953年 佐賀県生まれ 中国語学科卒 1974年 北アルプス表銀座縦走(3月) 1974年 槍ヶ岳北鎌尾根(12月) 1975年 宝剣岳滑川中央稜(11月) 1976年 日本山岳会バミール登山隊 コルジェネフスカヤ峰登頂 日本交通公社勤務 ☎0486-44-3578 (住所) 〒114 東京都北区中十条4-15-7 ☎03-906-6710
隊員 記録・撮影	波多野哲朗 	1936年 福井県生まれ ロシア語学科卒 1964-68年 映画制作および映画批評に従事 1969-79年 東京造形大学デザイン学科映像専攻、日本大学芸術学部映画学科、成城大学文芸学部芸術学科等で、映像学・映画実習を指導 現在、東京造形大学助教授、日本映像学会常任理事 ☎0426-61-4401 (住所) 〒192-03 八王子市松ガ谷38-26 ☎0426-76-9763
隊員 医師	太田吉雄 	1951年 新潟県生まれ 新潟大学山の会 1974年 カラコルム ヒスパー氷河-ピアフォ氷河 1974年 上越荒沢岳-越後駒ヶ岳(12月) 1975年 インドネシア キナバル山登頂 1978年 飯豊連峰縦走(1月) 県立山形中央病院勤務 ☎0236-23-4011 (住所) 〒990 山形県飯塚1353-1 中央病院宿舎401 ☎0236-44-7256
隊員 学術	麻田豊 	1948年 神奈川県生まれ 1974-76年 パキスタン・カラチ大学留学 1976-78年 在カラチ日本国総領事館広報文化センターに勤務 現在、大阪外国語大学インド・パキスタン語学科教官 ☎06-772-1271 (住所) 〒573 大阪府枚方市御殿山南町4 枚方合同宿舎3425 ☎0720-47-4528
隊員 学術	麻田美晴 	1952年 神奈川県生まれ 1976年から2度にわたりフランスに留学 1977年から1978年にかけてカラチに滞在し、パキスタンの風俗、習慣を研究、調査 (住所) 〒573 大阪府枚方市御殿山南町4 枚方合同宿舎3425 ☎0720-47-4528

遠征隊事務所 〒111 東京都台東区柳橋1-30-3 ☎03(863)1501 (株)パシフィックプロダクツ気付
大阪外国語大学山岳会カラコルム遠征隊事務局 事務局長 高橋洵

ラワルピンディから
カパルーへ

ラワルピンディではみんな走りまわった。食糧やこまごました資材の買い足し。ドルからルピーに交換のための銀行通い。観光局でのアワン氏との打合せ。リエゾン・オフィサーとの打合せ。隊荷のスカルドへの空輸……。ここにやって来るすべての登山隊が苦勞するこまごました繁雑な仕事を片づけていった。

ラワルピンディでの我々のホテルも広い中庭のあるホテル・ミセス・ディヴィスで、ほとんどの登山隊がこのホテルに宿泊する。そうこうするうちに、これも儀式のようなものらしいが、全員が下痢になった。でも大したこともない。

スカルドへの出発は5月19日だったが、飛行機が欠航したり、途中で引き返したりで、やっと5月21日に1時間の飛行でスカルドに着いた。

スカルドは、カラコルム山群のほとんどをその領内に治める、バルティスターン地方の中心地である。また、カラコルム山群に向かう多くの登山隊の出発点でもある。鋭い岩山や重厚な雪山が周囲を取り囲んでいる。幅広いインダスの滔々たる流れが村に沿っている。それに、村を吹き抜ける大砂塵。

我々はこので、ポーターの約半分38人と4台のジープを雇った。そして5月24日、85個約2トンの隊荷を積み込み、我々8名の隊員とリエゾン・オフィサーのナジブ大尉はジープに乗り込んだ。

道はインダス川上流に向かって東へ続いている。途中でインダス川と別れ、支流のシャヨック川に入り、この川の上流へと分け入って行く。

険阻な山腹に造られたでこぼこの細い石道。後輪がはね上がると、ジープもろとも川の中に飛び込みそうだ。実際、隊荷を積んだまま飛び込んでしまった登山隊もあったという。次は巨大な岩塊があちこちに散在している広々とした河原の中の道。道はそういったことを幾度となく反復する。

シャヨック川の兩岸の背後は常に峨々たる山並みで、時折、山間から流れ落ちる小川があるところに緑があり、杏の木があり、そして林がある。砂と岩塊の土地の中で、人間が生活を営める最小限の条件があるところには必ず村が存在する。

我々のキャラヴァンの出発点となるカパルーの村には、正午に着いた。5時間のドライブであった。カパルーの村は杏の木に埋もれていた。ジープをレストハウスに乗り入れる。全員砂塵を浴び、まつ毛まで白くなっている。レストハウスは3室と食堂、台所より成る木造平屋建て。シャヨック川に面している。前庭があり、その真中には大きな胡桃の木。庭の片隅には、バラが赤と黄の花をつけている。シャヨック川対岸の岩山の背後には、重なるようになって、雪をつけた尖塔群が列を作って、中空に抜き出ている。

カパルーで、統制品になっている砂糖と塩、小麦粉を購入、ナジブ大尉用の食糧、じゃがいもや小麦粉等も買い足す。パキスタンの登山規則により、リエゾン・オフィサーの食糧や登山装備はすべて登山隊の負担となっている。

ポーターの雇用はレストハウスの前庭で行った。スカルドですでに38名を雇っていたので、ここでは隊荷の重量約2トンに合わせて44名を雇い入れた。ポーターには1人25kg以下の荷物を背負わせることが、規定されているのである。44名のポーターを雇うのに400人以上の志願者が集まった。太田ドクターが聴診器を

あて身体検査をし、隊長が隊員の意見なども聞いて最終決定する。聴診器をあてるために、埃にまみれた衣服をまくり上げる。ほとんどの志願者の胸は、緊張で大きく動悸を打っているのがわかる。

カパルーから道はシャヨック川と別れ、サルトロ川沿いに東向する。サルトロ川に入るためには、まずシャヨック川を渡渉しなければならない。情報を収集したところ、渡渉はこのカパルーからではなく、もう一つ先のスルモ村からであることがわかった。そこで、スルモ村の対岸をポーターの集合場所とし、全ポーターに5月28日7時に集合するよう伝えた。スカルドで雇用したポーター達も、すでにカパルーに到着し待機していた。

5月27日、村に2台しかないというジープをチャーターし、ピストン輸送でスルモ村のはずれの渡し場まで隊荷を運ぶ。

シャヨック川渡渉

カパルーとスルモは、シャヨック川に突き出た丘陵によって隔てられている。ジープはカパルーの裏の急なこの丘陵をジグザグに登りつめ、広い台地に出た。驚いたことに、この砂礫と岩塊だけの荒涼たる台地に整地された畑があった。だが作物はない。多分山からの流水が跡絶え、もとの荒地にかえってしまったのだろう。1時間後にスルモの渡しに着いた。

先発隊によってもう渡渉が始められている。真中にふくらませたチューブ、両側にふくらませた羊の内臓を置き、その上に細い柳の枝を数十本組み合わせて紐でくり付けた筏——ザクで隊荷が運ばれている。大きさは畳3枚ほど。船頭は急流に沿って、細い棒でザクを巧みに操っている。5往復で隊荷と隊員が渡り終わったが、約4時間を要した。我々より1日遅れでカパルー入りした学術隊員の麻田夫妻も、渡渉を見学に来た。2人はカパルーで約1ヵ月の調査作業に入る。

キャンプは、隊荷の着岸した地点のすぐそばの河原の砂地の上に設けた。広々とした河原には灼熱した真昼の太陽をさえぎるものもなく、全員が干上がってしまった。太陽が沈むまで待つしかない。夕方5時頃になって河原に砂嵐が始まった。その時、私は仲間と共に灼熱の太陽を避けるため岸辺の小さな木立に向かっていた。

翌朝7時、約束の時間に全ポーターがテント近くの河原に腰を下ろして集合していた。各ポーターにプラバール・ボックスに入った約25kgの荷物をあてがった。彼らはこの荷物を細い紐を使って担ぐのである。1人1日約1800円の賃金を支払い出発した。

キャラヴァン開始

隊列は次のように組んだ。先頭に隊員2名と屈強なポーター10名。第2隊、第3隊には35人ずつポーターを配した。全ポーターの責任者はポーター頭のアリ。第2、第3隊は各々サブ・ポーター頭に預けた。しんがりには隊員2名を付け、その他の隊員はキャラヴァンの中間を自由に歩いた。ポーターには先払いで賃金を支払ったが、ポーター頭とサブ・ポーター頭には、無事BCに到着した時、役職手当付きで支払うことにした。

グルツェはシャヨック川とサルトロ川の合流点に長く続いた村で、やはり杏の木と石造りの家で構成されている。

この村のはずれのサルトロ川の河口にキャンプを張る。正面にはサルトロ川の



(上) インダス河に沿うカバルー
への道

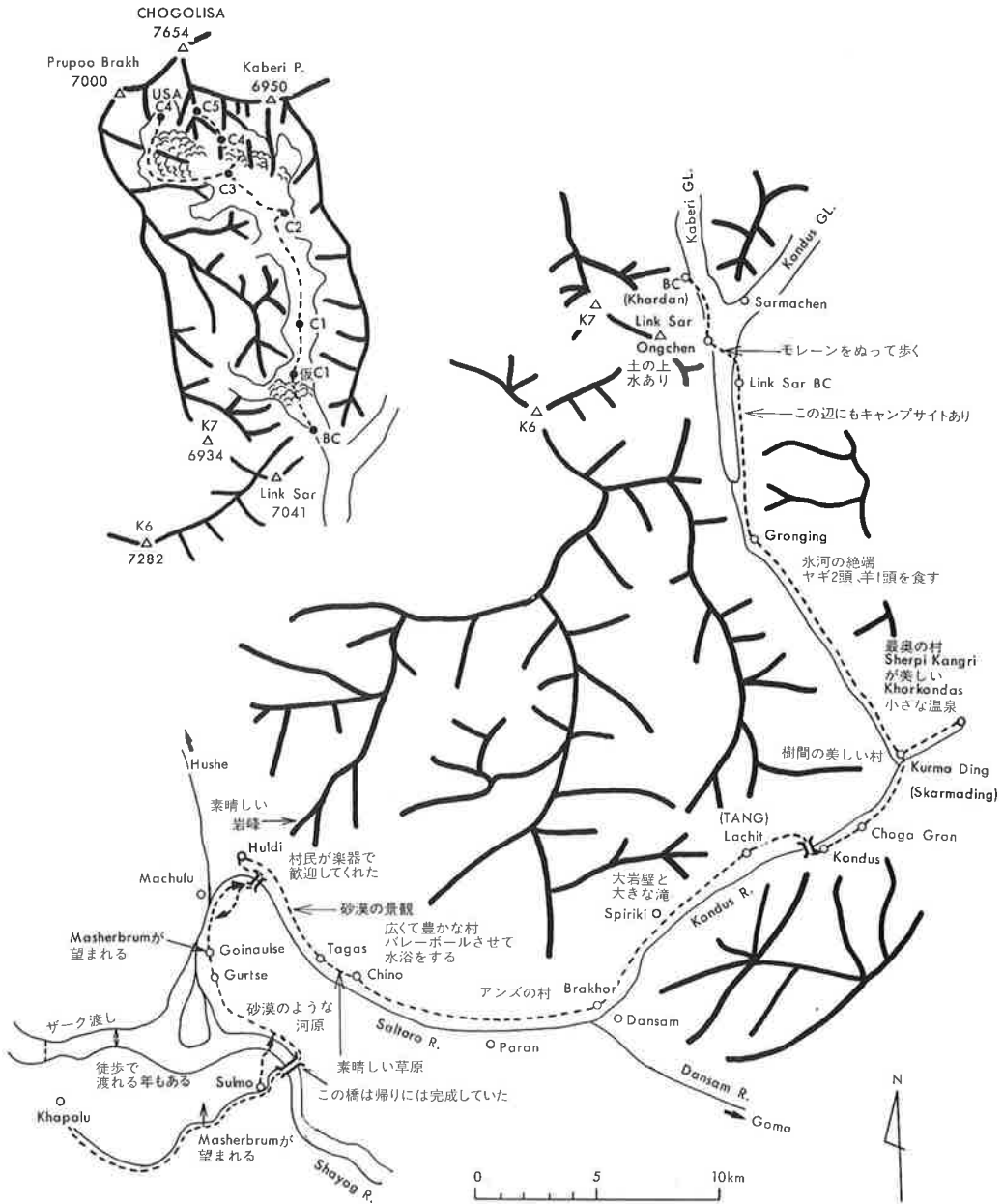
(中) シャヨック河をザフで渡る

(下) スルモ対岸のキャラヴァン
出発地点





C 4 より南面を望む



図：船井総一

支流、フシェー川が西方奥深くくい入っている。どんづまりに大きな山がある。頂上は雲で見えない。マッシュアブルムだ。

装備担当の船井隊員の提案で、毎日キャラヴァンが終わるとポーターの労をねぎらうためラワルピンディで購入したパキスタン・タバコ「K 2」と中国製マッチを1個ずつ支給することにした。5時になると砂嵐。

グルツェ村からは、タガス、ブラコール、ラチェットでキャンプを張り、5日目に最終の集落カルマディンに着く予定である。キャラバン2日目の宿泊地タガス村は、道中最も大きい村のようであった。モスクもあった。にわたりの鳴声もいちばん多かった。村の周囲の畑の灌漑も行き届き、村の中にも縦横に水が引かれていた。テント場の横にはバレーボールのコートもあり、村人達とバレーボールを楽しんだりした。山田、小林両隊員が風邪気味だったので、鶏を2羽買い、スープを作った。

サルトロ川は第3日目の宿泊地ブラコールでコンダス川とダンサム川に分かれる。我々の道は左のコンダス川に沿っている。道は大同小異で、巨大な岩壁の下や巨岩の転がった砂礫地を登り下りする。川をつめて上流に入り込むにしたがい、砂塵による被害は少なくなった。川幅が狭くなるにつれ砂嵐は勢いを弱めていく。

5日目、最終集落のカルマディンでポーターに1日休養を与え、我々も休んだ。羊1頭と山羊2頭、鶏3羽を買い、隊員とポーターの労をねぎらうことにする。山羊は1頭350ルピー、羊は160ルピーだった。しかし、これらが届けられたのは出発日の朝だったので次の宿泊地グロンジンまで連れていくことにした。山羊と羊はポーター頭とサブ・ポーター頭が綱をつけて急峻な砂礫の道を追い立てていった。鶏はポーターが足をしばり、小脇に抱えた。

グロンジンは押し出されて来たモレーンの大きな丘の手前であった。ポーター達は、これまでは村に着く毎に「アッサラム・アレイクム」と声を掛け、他人の家に泊めてもらっていた。だが、今日は青天井の下に寝ることになるので、大きなシートを4人に1枚配給した。ポーター達は皆1枚の毛布を持っている。この毛布は砂嵐の時は砂よけに、荷を背負う時は背当てに、寒い時にはオーバー、そして寝る時には布団になる。ポーター達はそれぞれ灌木の中にもぐり込み、石を周囲に積み上げてねぐらを作った。

夕方、1頭の羊と2頭の山羊をばらした。82人のポーターそれぞれに、両手に乗るぐらいの肉塊が行き渡った。大喜びのポーターは夜遅くまで焚火を囲み、歌と踊りを楽しんでいた。明日はモレーン上に行くことになる。

最初に出会うモレーンにしては、その状態は非常に悪かった。いきなり大きなうねりのような起伏が現れ、我々は氷の上に堆積した砂礫の小山を幾度も登り下りした。コンダス氷河とカベリ氷河の合流点の手前に着いたのは3時半だった。今日は距離はないが、これまでのキャラヴァン中最も時間的に長く、8時間以上歩いた。昨日の山羊肉のおかげで、ポーター達もよく頑張って歩いてくれた。

6月5日、先発隊が日本を出発して以来、ちょうどまる1ヵ月になる。今日でキャラヴァンも終わりだ。キャンプ地を出て約1時間後、氷河の合流点を左に回り込み、カベリ氷河に出た。その瞬間、眼前真正面に典型的な台形をしたチョゴリ

サの雪嶺が姿を現していた。

朝日を受けて、その幅広い頂上稜線は蒼空に線を引いたように鮮やかだ。頂上稜線よりなご落ちた、雪をべったりつけた東壁は、確かにみごとな純白のウェディング・ドレスだ。この山が別名「ブライド・ピーク」と呼ばれる所以である。南壁は斜めにしか見えないが黒々とした垂壁だ。この頂上からすっぱりと切れ落ちた大岩壁は、3つの三角形の岩壁を積み重ねたようになっている。これほど素晴らしい岩壁は、カラコルムの巨峰の中でも一、二を争うと思われる。

我々の目指す南稜は純白の東壁と南壁のコンタクト・ラインである。その中間部はオーヴァー・ハンクして、通過不可能のようだ。ポーターも隊員も荷物を下ろすのも忘れて見とれている。「バラ・サーブ。グッド・マウンテン。チョゴリサ！」ポーター達が私に言う。

BCはそこから1時間ほどのカベリ氷河右岸の土と岩の島状の所に設営した。4000m。計画では4500mぐらゐのモレーン上に設営する予定であったが、先はすぐアイス・フォールが出てくるので、ここにせざるを得ない。まだ、目指す山まではかなりの距離がある。南稜末端までは氷河のセラック帯やアイス・フォールを突き抜け、キャンプを三つは出さねばならないだろう。

BCの設営を終え、ポーター達にリターン・チャージを含め、賃金を支払う。会計の田中隊員はこれで一段落だ。C1、C2へ荷上げをするポーターも10人選んだ。

ポーター頭のアリともこれでお別れだ。アリはポーター達の間でも、通過する村の人達の間でも、すこぶる評判が悪かった。皆を棒で追い立てるからだ。隊員の間でも、最初はあまり評判は芳しくなかった。斉藤副隊長が「アリは遠征隊の中間管理職だ」と言った。実際、彼はリエゾン・オフィサーや私に対して顔半分でへつらい、ポーターに対しては顔半分で威嚇している。だが、キャラヴァンの安全も彼の努力に負うところが多かったので、最後には隊員達もアリには同情的になっていたようだ。

71人のポーターは山を下って行った。明日から氷河上のルート工作が始まる。

BCから北方にチョゴリサの上半分が見えた。下部は前山にさえぎられて見えない。夜になると、その白々とした梯形の山容に覆いかぶさるように、柄杓形の北斗七星と北極星が姿を現した。

ベース・キャンプ

BCの真東には、神戸大学山岳会が初登頂を果たしたシェルピ・カンリの大岩塊が、コンダス氷河を隔てて根元から頂上までさえぎるものなく姿を現していた。朝6時前になると、太陽がこの山の左背から最初の光線をBCに投げかける。BCの背後にはリンク・サールのギザギザの雪稜が、頂上を紺碧の空の中に突き上げている。BCからはこれらの山の方が距離的に近かった。

BCには隊長用テント、4～5人用ダンロップ・テント、8人用カマボコ・テント、リエゾン・オフィサー用テント、倉庫テントが設営され、10人のポーターは5人ずつに別れて石室を作り、その上にシートをかぶせて家屋を作った。



コンダス河下流を渡りフーシェ村へ



コンダス氷河舌端での休止



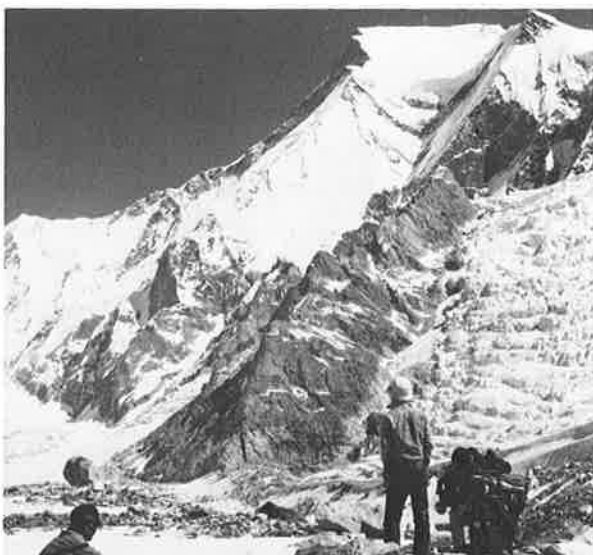
ハルディータガス間の砂床を行くキャラヴァン



ポーターへの給料支払い



ベースキャンプで肉の分配



チョゴリサ南稜

ベース・キャンプからC3へ

山田 昭一

BCからC1へ

BCから見ると我がチョゴリサは西方はるか彼方、カベリ・ピークのうしろにその頂上をちょっぴりのぞかせているだけである。長大なカベリ氷河は大きく蛇行しており、チョゴリサの基部までどんな状態なのか、どのくらい日数がかかるのか見当もつかない。BCを建設したとはいうもののチョゴリサに取り付くという実感はまるでない。まだまだアプローチの段階である。

当初我々はスペシャル・ポーターとして4人雇用するつもりで支給装備、食糧を準備していたが、BCが予定よりかなり低位置であること、キャラバンのロー・ポーター数が予定より下回り人件費に若干の余裕があったこと、BCから上の氷河上のルートも困難な箇所はなさそうであること、使えそうなポーターが思ったより多かったことなどの理由で、レギュレーション通りの装備は支給出来ないことを条件として10名を選抜した。何とか選ばれて高額収入を獲得しようと思死の彼らは我々の条件をすぐに受け入れてしつこく売り込んで来たが、選ばれなかったポーター達がすべて帰ってしまうと態度を一変させ、キャラヴァン中にしきりに愛敬を振りまいてすっかり隊員たちと仲良しになっていたと思っていたポーターが、テントがない、シュラフがないなどつつむじを曲げ、それにポーターの間でも派閥間の反目があったりしてすっかり険悪なムードになってしまい、あらためてポーター管理の難しさを思い知らされた。我々としても、無い袖は振れないとはいうものの、シートを余分に与えるなど出来る限りの誠意を見せて何とか懐柔を図った。リエゾンのナジブ大尉も我々の状況を理解し彼らの説得に彼なりに力を貸してくれていた。

BCを建設した翌6月6日、早速荷上げを開始する。隊員4名のうち2名がルートを探しながら先行し、あとの2名がやや遅れて10名のポーターを引き連れて進む。小さな登り下りはあるが概して平坦なだらけ広いカベリ氷河を、休み休み約3時間進むとやがて小規模なアイス・フォールに入り込む。中央よりやや右岸寄りルンゼ状にルートを探しながら登って行く。ルート工作するほどのことはない。30分ばかり登った所の平坦地に来ると、ポーター達がここがオーストリア隊のデポ地跡だと言う。5年前のオーストリア隊に参加したポーターはいないのに何故知っているのかわからないが、そう断定的に言われると本当らしく聞こえる。オーストリア隊にハイ・ポーターとして使われたポーターが1人我々のロー・ポーターの中に居たが、その男が教えておいたのであろうか。それともデタラメなのか。とにかくそれ以上進みたがらないポーターを、もう少しだからとなだめすかして前進すると次第にルートが悪くなり、新雪にもぐる所もあって重荷のポーターが手こずり始めたので、適当な平坦地にデポすることにした。ポーターを先にBCへ帰し、隊員4人が2人ずつに分かれて偵察に出る。斎藤副隊長と太田ドクターはそのルンゼを真直ぐ上に登って、何とか上部に抜けられる目途を立てて戻って来た。田中、山田は左岸にルートがありそうな気がしてトラヴァースを試みたが、セラック帯の大クレヴァスに阻まれて引き返した。

7日はポーターの要求を容れて荷上げは休み、船井、田中がアイス・フォール中央ルンゼルートを再偵察。8日は荷上げと並行して斎藤、太田、山田が左岸ル

ートを偵察した結果、アイス・フォールは中央のルートをとることに決定した。

9日、全員でアイス・フォールの上4100mまで荷上げし、船井、田中、山田がそこにDCを作って泊。翌10日、3名はDCから偵察に出て4200m地点にC1の位置を決め、更に先まで偵察してDCに戻る。この日BCではDCへの荷上げをほぼ完了し、ポーター4名を解雇した。11日は全員レスト。DCの3名もBCへ下る。гент峰を攻撃中のドイツ隊のリエゾンが遊びに来ており、我が隊のナジブ大尉をそそのかしてそれぞれのコック共々4人でカパルーに下って行った。ポーターからメール・ランナーに起用されたシュクール・アリもBCからの第一便を持ってカパルーに向かい、BCは隊員とポーター5人が残り、ようやく落ち着いた霧囲気になった。

12日、田村隊長以下全員でC1を建設すべく大移動。DCは途中で撤収する。BCに若干荷物が残ったのでポーター2名はDCからBCに引き返す。C1予定地へすでに2度足を運んでいる田中がポーターを先導して先行したが、途中ですっかりルートを間違っしまい遠回り。ポーター達に「タナカ・ノー・グッド」と大不評。田中も苦笑い。2日前にしっかり踏み跡をつけて来た筈なのに、日差しが強く雪解けが激しく、トレールは跡形もなく消えてしまっていた。ズボラをせずケルンを積んでおくべきであったようだ。C1ではポーター達はちゃっかりと雪のない場所を見つけて石をきれいに並べて整地し、快適そうなサイトを作っている。我々も彼らを真似て石を並べて下手な整地を試みていると連中がやって来て「ジス・ブレース・ノー・グッド」と言い、雪の上を指して「ヒア・グッドね」と我々の稚拙な整地技術を見透かしたようなアドバイス。癪だけどあっさり連中の言を容れて雪の上に隊員のテントを張る。

C1からC2へ

13日、C1からDCへ逆ボッカに行き、そこで昨日BCへ下ったポーター2名と落ち合ってC1に全員集合となる予定であったが、なんとこの日は朝から雪。BC建設以来初めての悪天である。動けない程悪い状態でもないし、BCの2人のポーターのことも気懸りなので行動しようという意見もあったが、C1の3人のポーターはまるで動こうとしないので我々も結局連中のムードに引きずられてズルケ休みの休養日となってしまった。BCの2人のポーターもどうせ動いていないであろうと高をくくっていた。ところが夕方になり誰かの叫び声が聞こえたのでテントの外に出ると、なんと降りしきる雪の中を2人が上がって来る。新雪で昨日のトレールはすっかり消えてしまっているというのに、まるでルートを知らない2人がよく上がって来れたものだ。バルティ・ポーターに対する世評は必ずしも良くないが、この2人が特別なかどうか予想外の働き振りである。

14日、相変わらず小雪が降っているが2日も続けて沈ではもったいないので荷上げを強行する。ポーター達はぐずっているが、かまわずに隊員はDCへ。DCに着く頃には雪も止んだ。荷を担いでC1に戻る途中、ポーターはすれ違いざま、「ジャパニ・ポーター・ベリー・ストロング」などと我々をおだてやがる。一体どっちが隊員だかポーターだか。

田村隊長が夜中に一酸化炭素中毒で呼吸困難になったとか。

15日、小林、田中、太田、山田の4名でC2建設に向かう。早朝陽のあたらぬ

うちは雪が締まって歩きやすいが、太陽が顔を出すとたちまち雪が軟弱になり、こちらの気持も軟弱になって、小休止のつもりがいつも大休止になってしまう。カンカン照りの猛暑の中のラッセルには参ってしまう。左岸カベリ・ピーク側から来ている支氷河の出合付近にC2を建設する。4500m。

16日、小林が夜中に食中毒の症状で苦しんだらしく、朝起きても冴えない顔をしている。彼を1人C2に残し、田中、太田、山田の3人でC3の場所を決めるべく荷上げを兼ね偵察に出る。膝までのラッセルを続けてカベリ氷河左岸沿いに進む。氷河の奥にアイス・フォールが見え、出来るだけその基部に接近しようと頑張るがちっとも近づかない。適当なサイトが見つからず、左岸からの小氷河のすぐ手前の台地を一応C3の候補地として荷物をデポする。C2への帰路、山田がクレヴァスを踏み抜いて8mほど落ちこちるアクシデントがあったが、奇跡的に怪我もなく地獄の底からこの世へ這い出して何とか笑い話で済ませることが出来た。C2に戻ると田村隊長以下全隊員が登って来て我々の帰りを待っていた。田村、波多野、小林、太田はC1へ下る。

C2からC3へ

17日、齊藤副隊長、船井、山田の3名がC3の建設に向かう。昨日のクレヴァス・ルートは避け、1本中央寄りのモレーンに歩きやすいルートを見つけて比較的楽に進む。前日のデポ地より少し手前の小さな水溜りのそばにC3(仮)を建設する。4800m。この位置ではアイス・フォール攻撃にはちょっと遠すぎるため、後日(22日)もう少し上部4900mに引越した。氷河湖のそばの雪原の快適なキャンプで、このC3が実質的にチョゴリサ攻略の基地としての機能を果たしたのである。

我々がBCを建設してから仮C3を建設するのに12日かかったのであるが、我より3週間遅れて入山して来たアメリカ隊はその半分の日数でここまで達している。我々が先にルートを拓いておいたことや、彼らの登り方にもよるのであろうが、この時期の3週間の違いは大きく、氷河の状態がまったく変わってしまい、新雪やヒドン・クレヴァスに悩まされた6月初、中旬とは別世界のような様変わりである。我々が下山した7月下旬にもなればその違いは一層顕著で、その時は雪の上を歩いたのはC3からほんの5分くらいで、あとはモレーンのガレキか氷の上ばかりであり、C3からたった1日でBCまで駆け下りたのである。カラコルムでは、カベリ氷河のように長い氷河ルートをアプローチとして使わねばならない山を狙う場合、登山時期は7月以降にした方が得策ではないかと痛感した。

とにかく、ようやくここにC3を建設した我々はいよいよ目指すチョゴリサの攻撃態勢に入った。



C4よりC5への荷上げ



左からリンク・サークル、K6、K7

C3より上部へ

船井 総一

アイス・フォールとの
間

6月17日にC3を建設したが、標高は4800mと全く冴えない。頂上の7654mまで高度差は2800mもある。しかもここからカベリ氷河本流はアイス・フォールとになっていて、このアイス・フォールを越さないことには目指す南稜には直接取り付けない。南稜がC3側に切れ落ちた岩壁を登れば取り付けなくはないが、我々は全員岩登りなどという危険なことはしない主義である。岩壁とブロックや雪崩の落ちそうなルートを除外するとアイス・フォールを登るしか手はなかった。しかもアイス・フォールの上には、南稜から直接比較的なだらかな岩まじりの雪稜が、上部プラトーにまで続いてきている。これを登らなければ上部へのルートは拓かれないと確信して、翌18日からアイス・フォール帯のルート工作に入った。

C3から見上げてアイス・フォールの右と左が登れそうであった。そこでまず右のルートが比較的穏やかでクレヴァスも少なそうなのでそちらを偵察に行くことにした。第1日目にフィックス・ロープを6本張り、アイス・フォールももうほぼ上部へ抜け出たかと思われる高さまで達した。カベリ氷河本流ははるか眼下で、C3のテントもかすかな点として望まれる。巨大なセラックと縦横に走るクレヴァスとで決して良いルートとは思えないが、南稜末端に取り付くには最短のコースで、その日は我々も満足してC3に戻った。そしてその翌日再びルート工作に出るが、最後に大きなクレヴァスに行く手をさえぎられてしまった。クレヴァスと言うよりも大きな氷の断層とも言える地形に全員ア然とせざるを得なかった。それでも右へ左へとルートを求め、断層の中へ懸垂下降で降り立ってみたりしたが、結果は同じであった。そして5日目になって結局はこのルートを放棄してしまった。今度は南稜へ取り付くにはかなり遠回りになるが、左側を攻めてみることにする。しかしこのルートも前のルートと大同小異で、天候も悪く、標高5000m付近で予定通りに先のキャンプがのびない焦立ちで、早くも隊員には焦りの色も感じられる。ひょっとしたらこのまま先のルートがのびないでカベリ氷河の上をウロチョロしただけで日本へ帰らなきゃならないんじゃないかしらと思うと冷汗さえ出る。

アイス・フォール帯が
眼下に

6月26日、小林隊員と私の2人で通称「裏山」と呼ばれている、C3から東側へせり上がる小氷河へ偵察に出かけた。この小氷河はC3からは上部がどのようになっているか見えないうばかりでなく、BCから見た時には上部の懸垂氷河からブロックが落下して大きな雪崩を誘発していたので、当初はルートに取るなど考えも及ばなかった。我々は常に物事に動ぜず、しかも危険には決して近寄らぬと堅く誓い合って日本を出発したのであるから、これは当然のことであった。しかし、登り始めてみるとぐんぐんと高度をかせぐことが出来、C3は見る見るうちに小さくなってカベリ氷河ははるか眼下に望まれるようになった。この日はちょうど天候も悪く、視界もさほどなかったが、このままどんどん登れば我々の目指す南稜へは今まで考えていたよりも余程簡単に取り付けそうな気配さえ感じられたが、降雪が激しく引き返す。

さらに6月28日、今度は斉藤副隊長と2人で「裏山」ルートを登る。先日引き

返した地点でザイルを拾いさらに登ると、左手からは巨大なクレヴァスがいくつも行手手をさえぎるように割れている。それらを避けるように右へ右へと進路を変更すると今度は右手からもクレヴァスで、大きなものは5m以上も口を広げて待ち構えている。これらを右へ左へのろりのろりと遠巻きに避けて通るとやや傾斜が弱まり、またもや巨大なクレヴァス、命のザイルを確認して、這いつくばってクレヴァスの底をのぞくと、下は奈落の底、ぞーっとしながら左右を見回すと右の方へ狭くなっているようすだ。そこで今度はクレヴァス沿いに右へ右へそろりそろりと慎重に進むと、やっと渡れそうな気配。ザイルで確保しながら、ストックで雪面を突き刺し、雪面の下であろうはずである氷の足場を一つずつ確認しながらやっとの思いで渡ると、前方が大きく広げて、ただ広い雪原が目当りとなった。しかし残念なことにはガスがかかり、前がよく見えない。

ガスの中を南稜へ向けて進むが膝までもぐる雪が邪魔をする。それでもガスの合間をぬって見えた南稜上の小さなコルを目指して進む。コルの手前には急な雪の壁が控えている。やっとの思いで雪原を渡り終え急な雪壁の下に立つ。ここに至るまでのラッセルでかなりの疲労を感じ、そもそも最後にこんな雪壁があらうとは約束が違う。のりくらりと歩けば南稜上に出るはずであったのに。しかし、もう一度あのいまわしいアイス・フォールを登ることを考えれば、いくら雪壁が急だろうとこっちのルートは天国のようなものだ。そして小クレヴァスを越えて最後の急な200mを真直ぐに登ると南稜上の小さなコルに出た。

ここから上も傾斜は強いがルートは拓けそうだ。そしてこのコルからはあのすべてのものを拒絶する偉大なるアイス・フォールもはるか眼下にある。ガスの合間に望むアイス・フォール帯を目をこらして見ると、何やら数個の点がウロウロしているのが見えた。それはまぎれもなくアイス・フォールで苦闘している我々の僚友であった。彼らはトランシーバーで「もうすぐアイス・フォール帯を突破できます」と言ってくるが、上から見ていると気の毒な僚友のまだ上にも累々とクレヴァスが重なり、ひいき目に見て3分の2、客観的にはやっとなん分ちよっと登ったにすぎず、C3へ引き返すように勧告する。下から望むと不幸にも上部の傾斜の弱くなった部分が見えなかったのだ。

翌29日に南稜上の小コルへC4を建設する。この稜は正確には南稜から派生した支稜なのだが南稜と同等の規模を持ち、南稜へはかなり急な雪稜と岩稜となって突き上げている。左手には小さな懸垂氷河がかかり、右手は下の雪原まで切れ落ちている。C4建設の翌日から始まったルート工作では懸垂氷河上をクレヴァスを避けながら登り、途中で左手の懸垂氷河からルンゼ状に右手の雪原へ落ちるラビネンツークを斜めに横断してもう一度南稜支稜上に出るルートを採用。しかし、例年になく悪天候でルート工作は遅々として進展しない。支稜直下では平地ならば膝からせいぜい腰ぐらいの雪が、急な傾斜のために胸あたりまでの雪かきとなり、標高5800mという高さの苦しさとの二重苦に悩む。その上塵雪崩に襲われたりで意気上がらない。

支稜上へ出れば雪も多少堅くなり、高度がかせげるのではないかという期待は、しかし見事に裏切られた。その上ふんわりと乗った雪の下に非常に堅い氷の層が

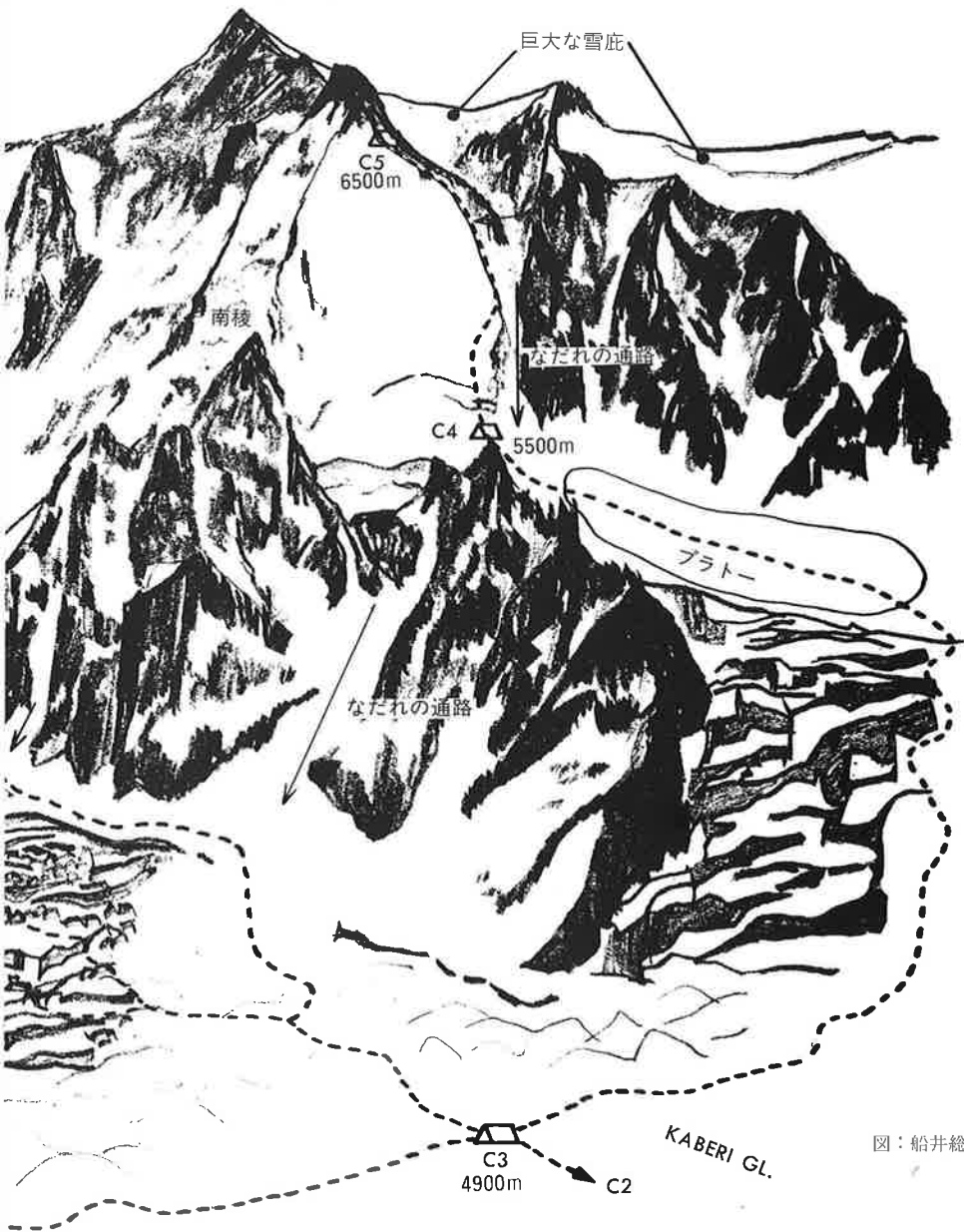
C5建設—雪と氷との
闘い



出始め、6200mを越すあたりから顕著となり、アイス・ピトンやスクリューが見事に効き始めた。

7月7日にやっと50mのフィックス・ロープを25本張り終え、9日にC5を決定する予定でC4を出る。途中雪面下の氷の層を少し切り拓いてビヴァーク。しかし氷がやたらと堅くてスコップもノコギリも歯が立たず、ピッケルさえもはね返される。ザイルにぶら下がってのみじめなビヴァークの後、翌日さらにフィッ

CHOGOLISA 7654



クス・ロープ7本分を登り、やや傾斜の緩やかに感じられる場所をC5と決めてC4へ下る。この上からはもう岩稜となり、標高は6500mである。

計画ではC5が7100~7200mで最終キャンプとなる予定だったが、現実にはC4で5500m、C5で6500mでしかなかった。これはBCが予定以上に低かったこととC3までが全くと言って良いほど高度がかせげなかったことによるのだが、C5の6500mというのはまずまずの出来であった。

悪天が続き、14日になってやっと山田、小林、田中、私の4名でC5建設に向かうが、フィックス・ロープを掘り起こしながら進むので、10時間歩いてなお10日に決めたC5予定地にはとどかず、途中で氷の層を切り拓いてテントを張る。テントを張ったとは名ばかりで、氷をピッケルで削って段を作り、一晚中ザイルにぶら下がって座っていたと言った方が正しい。なにしろ氷の上であるからずるずるとずり落ちてしまい、実にみじめな思いをした。山の生活においても常に日常的な安楽さを求める我々にとってはまさに屈辱的な一夜であった。明日はC5予定地に水平にテントを張ってグッスリ眠るぞと思った翌15日、C5予定地も残念ながらひと皮むけば氷の斜面で、氷を切らなければテントは張れなかった。このルートに取り付いた因果とあきらめ、氷を砕き削るが、ピッケルのブレードでははねかえされ、ピックで声を合わせて砕いてゆくしか方法はない。降雪の中、日も暮れ、応急にテントを張って中に入るが、水平なのは3分の1で、3分の1は緩やかな傾斜がついており、残り3分の1は完全な斜面となっている。水平にグッスリ眠るどころか昨夜よりも条件は悪い。コンロを手を持って炊事をし、テントを焦がしてしまい、ザイルで確保されて用足しをし、曲りなりにもシュラフに入ったのは12時半となっていた。眠れぬ夜を明かし、翌日も山にはピッケルをふるう声が響きわたった。4人がかりで氷を打ち砕くこと約8時間、やっと約3.3㎡の氷の台地を作り出すことに成功し、水平に眠ることが出来たのだ。屈辱のかつ劇的なC5建設だったが、翌17日には乏しくなった食糧の補給にC4へ下らなければならなかった。

人命は頂上よりも尊し 19日に齊藤副隊長以下、山田、小林、田中、私の5名で一気に頂上を攻めようと意気込んでC4を出る。食糧は5日分である。C4に残る太田ドクターと波多野隊員の激励を受けてC4を後にする。この日もまた南稜支稜上に出る10時頃から雪が降り始めた。天候が悪化する時は決まってK6にガスがかかる。この1週間でまともに晴れたのは17日ただ1日である。降るのは一向に構わないが、降るとフィックス・ロープが埋まってしまい、雪と格闘しなければならない。この日もラッセルに苦勞しやっとのことで17時前に9日にビヴァークした地点まで登りあまりに雪が強くなってきたのでツェルトをかぶって休憩した。

我々は事情の許す限り毎時00分毎にトランシーバー交信をしていたのだが、この日はどういうわけか朝からC4との交信がうまくいってない。しかし、この時の17時の交信ではいきなり「こちらC3、こちらC3、アタック隊感度ありましたら応答願います」と張りのある波多野隊員の声飛び込んできた。「波多野さん、C4にいるはずだけど」と思ったけれど、「こちらアタック隊、感度良好」と誰かが答えると、「アメリカ隊が事故を起こし、その内の1名が救助を求めてC3へ下ってきている。彼は日本隊に救助を要請している」「えっ！ もっと状況を詳しく説明して下さい」「アメリカ隊が西稜直下で事故を起こし転落、1名は死にかけているが生きており、もう1名は足の骨を折って動かすことができず、遭難現場付近に放置、非常に危険な状態であると交信した後またも交信不能となってしまった。

この交信の後我々はツェルトの中で考え込んでしまった。まずわからないこと

は今朝C4で別れた波多野隊員が無人であるはずのC3にいることであり、はっきりしていることはアメリカ隊が遭難して救助を求めていることであった。

時と場所は異なるが、私は1974年の夏、パミールのレーニン峰でソ連人女性8人の遭難に出くわした。この時我々は高度6700mで3晩猛烈な吹雪のためツェルトの中にとじ込められてビヴァークし、4日目に頂上へと向かった。そして発見したものは6950mから頂上直下に至る各所に横たわった7つの遺体であった。この時の模様を私は次のように書いている。「ここまでで5人である。……(中略) ……しかし、私は全く無感情でいた。5人もの人間の死体を見、通り過ぎてきて、この無感情は一体何だったろうか。疲れ過ぎていたためか、5人が私とは毛色の違う人間だったせいだろうか、それとも私の頭にはレーニン峰の頂しかなかったのか。もし、人としての感情を失い、ただ頂上へ登る機械と化していたのなら自分ながら恐ろしい。そこまで自分の魂と感情を押し殺して登った山に何の価値があるだろう。かりに、女性隊の中に虫の息となりながらも生存者があったなら、私達6人はどんな行動をとっていただろうかと思う。……(中略)……空はあくまでも青く、レーニン峰は空の青ときわだって白い。この美しい稜線の雪の世界でこんな悲愴な光景を眼のあたりに見ようとは想像さえしなかった。雪面に点々と若い女性の死体が横たわっているのである。しかも、私達は直接彼女達の遺体をどうすることもできず、頂上目指し登るのである。」(『パミール』田村俊介編著、ベースボール・マガジン社刊)

この時は全員が既に死亡していた。今回は違う。ツェルトの中では「死にかけているけど生きている」という波多野隊員の声が妙に重い響きを持ってその場の雰囲気支配している。アメリカ人の救助に向かうことは、我々の乏しい食糧からして頂上を諦めることであることは全員がそれぞれに覚悟をしていた。また2名の遭難者を無事にC3へ降ろすには5人全員が救助に向かう必要があることもすぐに了解できた。決断は18時の交信の後にされるはずだった。

「もっと詳しい状況を聞かせてほしい」「先程の交信で言ったように、2名が遭難現場におり動けない。彼らのいる場所は上からの雪崩の危険にさらされているらしい。できるだけ早く彼らを移動する必要がある。救助を求めて下山してきた1人も興奮しており、それ以上のことははっきりしない。要は我々がアメリカ隊の遭難救助の要請に応じるか応じないかだ」「了解しました。下山に移ります」

山田、小林両隊員はC5へ撤収に向かい、斉藤副隊長、田中隊員と私の3名はC4へ下り始めた。暗くなった雪面をヘッド・ランプの光で、フィックス・ロープにつかまりながら下る。下っても下ってもフィックス・ロープは闇の中、吸い込まれるように下へ続いている。しかし、そこは威力絶大なフィックス・ロープ、確実に張られたロープに導かれて下れば良かった。ところが、このフィックス・ロープの終点からC4までの下りが難渋した。朝歩いた足跡は降雪によりかき消され、頼りないヘッド・ランプの光ではどこがルートかわからない。おまけにクレヴァスの危険もある。かと言ってこんな所でビヴァークするのは真平御免だ。結局、尻と手を雪面にこすりつけながら、C4へ帰れた時は夜中の12時だった。

そして翌20日、重い荷物にフラつきながらC3へ下った。そこには首を長くして太田ドクターと波多野隊員、それにアメリカ人のダグが待ち受けていた。

遭難救助

副隊長 齊藤 清雄

“Emergency, emergency, Japanese, help me!”アメリカ隊のダグがイスラマバードにて再会の折トランシーバー片手に当時の緊迫ぶりを再現してみせた。

雪がよく降った。氷河上のC 3 (4900m) から上部は降雪と表層雪崩でトレールもすぐ消え、毎回ラッセルであった。日数、食糧とも押し迫っていた。C 5 設営後、C 4 に全員集結、C 5 からラッシュにてピークを目指すことにした。C 5 から約200 m を乗り越えれば、3段の雪壁を経てピークだった。各隊員の調子により、各々がパーティを組み、ラッシュ・アタックと考えた。

7月19日、雪。太田、波多野兩名とポーターのアブドゥラー、オラムの見守る中を5人でC 4 を後にした。

アメリカ隊3名(内カナダ人1名)は1975年オーストリア隊初踏の西尾根ルートからピークを目指していた。

C 4 の太田、波多野は当日正午トランシーバーのスイッチを入れた。アメリカ隊ダグの“Emergency”が飛び込み、何事かと緊張した。「2名雪崩に巻き込まれ、900m流された。瀕死の重傷、水も受けつけず、動かすこともできない。ツェルトを被せたままビヴァーク。至急救助頼む！」日本隊に救助を求めに走ったダグは無人のC 3 でトランシーバーを見つけ、何度も呼びかけた。C 4 でそれを捕えた。波多野だけがBCでアメリカ隊3名と知り合っていた。他人事ではなかった。太田、波多野は急拠C 3 へ下り、ダグと会った。ピークを目指しC 4 を発った5人との交信は16時の予定だった。重傷救助を待つ2人の安否を気遣い時の経つのがもどかしかった。16時トランシーバーのスイッチを入れると同時に波多野の緊張した声が飛び込んできた。「救助緊急を要する」感度悪く詳細不明。交信途中で切れる。降雪を避け、ツェルトを被っていたアタック隊は、この緊急救助要請をかみしめる。アメリカ隊遭難の詳細不明ながら、我々は、自分達の立場だけはよくわかっていた。まず、タバコを喫って皆にも一寸考えてもらった。現在6300m、一時間少々でC 5 に入れる所にいた。私には一瞬、ためらいがあった。動けない重傷の2名をアメリカ隊のC 3 から我がC 3 まで、クレヴァス帯の中を降ろせるか。私たちの食糧、装備全てC 4、C 5 に上げていたため、それらをC 3 まで降ろし、更にアメリカ隊のC 3 まで上げ、救助に間に合うか。限度一杯の食糧しかない私たちにとって、再アタックの可能性は消え登山活動は終わる、と。交信の時間が迫る。若いメンバーに問う。「向かきましょう、やってみましょう」

17時交信不能。夜間行動に備え、腹ごしらえ、装備類をリバックする。18時再交信。「今から救助活動を開始する」

5人は2手に分かれた。山田、小林はC 5 に登り、船井、田中、齊藤はC 4 へ降り、食糧、装備その他を回収する。降雪続く。山田、小林は21時30分C 5 着、泊。C 4 へはフィックス・ロープの終わった所から手探りでトレールをたどり、0時着。翌20日、下降はラッセルと重荷で一苦勞。途中、雪崩で谷中雪煙、爆風にさらされ、雪崩の舌が真近に迫り、ヒヤリとする。C 3 入りかなり遅れる。早速ダグに状況を聞く。太田ドクターとダグ現場へ向かうも、霧と雪で引き返す。

21日、晴れた。船井、太田、田中、ダグの4名、アメリカ隊のC 3 の現場へ向か

アメリカ隊隊員
Howard Weaver
リーダー25歳
COLORADO, USA
Douglas Cannalte
21歳
COLORADO, USA
John Wittmayer
27歳
VANCOUVER, B.C.
CANADA

う。C5からの2名も重荷とラッセルに苦勞したが、昼我々のC3へ着。波多野も救助に向かうことを切に望んだが、救助隊との連絡、アメリカ隊リエゾン、ポーターとの調整のためC3に残ってもらう。山田、小林、斉藤も14時出発、途中雪原でビヴァーク。各々要所にフィックス・ロープ、スノーバーを配置。

朝出発の4名が現場に着いた時、遭難者2名の衰弱を見て、一瞬危ないのではと思った。彼ら2名はあれから2度雪崩に会い、ツェルトを破り、はってアメリカ隊のC3のテントまでたどり着いていた。3晩のビヴァークであった。

太田ドクターの診断は、カナダ人ジョン—膝複雑骨折、顔面挫傷、凍傷。アメリカ人ハワード—膝捻挫、頭強打、顔面挫傷、凍傷。両者とも極度の脱水症状で衰弱しており、安静にして体力の回復を計る必要有り。

22日、快晴。後発3名もアメリカ隊のC3に到着。救助の手が差しべられ、精神的ショックより立ち直り、両者とも食欲が出てきて、みるみる体力を回復していった。やってきたかいがあった。動かせる。できるだけ早く降ろした方がよい。船井をはじめ降ろす準備にかかる。パイプ背負子を切ったりつないだり、滑走面にプラパールを取り付け、臨時のスノー・ボートを作る。ハワードはダグの肩を借り、何とか歩いてもらい、ジョンはボートに乗せて6人で引き降ろす。

23日も快晴。途中の雪原まで迎えに来よう頼んだ2名のポーター、アブドゥラーとオラムはアメリカ隊のC3まで上がって来て、出発しようとしていた我々をいたく感激させた。彼らのお陰で、捨てようと思っていたアメリカ隊のテントも救われ、重傷の2人も幾分快適さが保障された。

スノー・ボートとともに苦業が始まった。両側に各々3名が付き、引いたり、持ち上げたり、クレヴァスを渡したり、吊上げ吊下げを繰り返して、中間の雪原まで思ったよりはかどった。高度の順応が幸いしてか、何となくやり遂げてしまったが、ボートに乗って苦痛に耐えていたジョンは我々のあえぎの激しさに倒れてしまうのではと心配になったようだ。途上、日本のカゴ、リキシャ・スタイルの旅だと——アメリカ隊は『將軍』の本を持ち込んでいた——冗談を言いながらではあったが、ジョンにとっては苦痛そのもので、涙がほとばしること何度もあった。一度スノー・ブリッジで振られ、空間に浮かんだ。骨折の膝にも体重がかかり、その激痛もさることながら、青々と深いクレヴァスを足下に見たジョン、思わず、「I saw the hell!」と肝をつぶした。

雪原での夜はダグが我々のため、これサービスに努め、彼らの山でのフル・コースを真心込めて作ってくれた。彼は傷を負っている2人へ、我々へと心憎いほど気を配っていた。ちなみに彼ダグは沖縄は座間の産。

泊りのこの雪原から氷河上のC3まではあと1日である。

翌24日も晴れた。振り仰いだチョゴリサは屹立している。氷河への最後の雪崩跡を下る時は我々のポーター4名の加勢を得た。氷河横断途中よりアメリカ隊のポーターも加わり、「セーノ、ヨイショ!」の掛声も高く、波多野に迎えられC3に着いた。彼らをアメリカ隊のリエゾン、ポーターに託した。彼らはその日の中に下山していった。

食糧も尽きてしまった。ポーター4名とともに、翌正午、我々もチョゴリサを背にした。草のあるBCには21時に着いた。山登りも終わってしまった。



救助を求めて我々のC3にたどりついたググは、運よくそこに置かれていたトランシーバーで我々に急を知らせてきた。その頃、私と波多野氏はアタック隊を送り出し、数日間は何もする必要がない代り、ただじっと決着が着くまで待っていなければならなかった。私は、波多野さんのように文章を書いて時間を有効に使う才能もなく、できるだけ時が速く経つようにと念じつつ冬眠のような過ごし方をしようと思った。アタック隊には多少気がひけたが、朝から「昼寝」をして、浅い眠りに入っていた。こんな時に連絡が入ったので、私は、苦勞して寝ついたのを起こされた時の気持ちと、何もする事のない手もちぶさたに仕事を与えられた安心感との二つを覚えた。

状況を早く聞きたいし、とにかくC3へおりなければ話がよく通じないので、個人装備と多少の共同装備をまとめ、C3へ下った。話を聞けば、6800mの地点で雪崩にやられた、というより、乗っていた雪面そのものが滑り落ちて高度差800m下の平地まで落下し、そこにビヴァーク中なるも常に雪崩の危険ありとのことであった。遠く望めば、なるほど落ちないのが不思議と思えるほどの急な壁だ。1人は膝に骨折だか脱臼をこうむり、他の1人、隊長であるハワードは、頭を打

っていて、言動がおかしらしい。ダグの言うには、とにかくできるだけ早く雪崩の恐れのない彼らのキャンプまで負傷者を運んでやりたい、と。我々もできるだけ早くそうしてやりたいのは同じであった。その日は、アタック隊との交信でできるだけ早く救助に向かおうという確認をした。ところが翌日、昼を過ぎても彼らは見えず、ダグはしびれをきらし、1人で、コンロ等の物品を借りて現場へ戻りかけた。その最中、アタック隊が下りてくるべき途中の谷で大きな雪崩が発生。これを見たダグは、責任を感じてか引き返し、もし雪崩にやられたのならこっちの救助が先だと言ってくれた。なるほど、その雪崩は大きく、ゆっくりと斜面をおりる雪煙は静かに広がり、しかしながらいつまでたっても勢い衰えず、我々のC3までものまれるかと思わせるほどだった。

心配しているうちに彼らの姿が見え一安心。そこからは普通1時間弱でC3に着けるはずであったが、2時間経ち3時間経っても一向に彼らの姿が大きくなる。ダグは流れ過ぎる時間に耐えきれず、私と2人で先に行こうとせかすし、私達はアタック隊合流まで行動せぬよう言われているし、板ばさみの状態であった。いざ彼らが下りてきたら文句の一つも言ってやろうと思っていた。が、彼らの姿を見、前日の行動を聞き、荷物の量を見たら、いやいや御苦労様でした。としか言えなかった。時間的にも体力的にも、全員で救助に出発するのは無理と判断。ダグと私が先に行くことになり、出かけた。しかしこれまた運悪く、上部の雪田でガスに囲まれ2m先も見えぬ。とても危なくて歩けぬ。私は、自信がないから1人ででも帰らしてもらおうと言った。ダグは特に私をなじるでもなく、ややがっかりしたようすではあったが、結局引き返した。今思えば、引き返してよかった。というのは、途中、フィックス・ロープも張ってない、スノー・ブリッジはあるし、7~8時間はたっぷりかかったし、強行していればテントもシュラフもないままビヴァークさせられたろう。結局、その次の日、つまり遭難後4、5日後に彼らのテントサイトに着いた。転落した雪壁から数百m離れていそう。それだけの距離があれば、多少の雪崩が再び起こっても、少なくとも精神的には一安心だ。彼らは転落した後、体一つでそこまでたどり着いたらしい。ジョンは到底歩けぬから、這って来たようだ。

テントの中で、ハワードは上半身起きており、ジョンは仰臥していた。ハワードは、こちらの呼びかけにほぼまともな応答をしたが、これは呼びかけに応じてだけで、自発的な行動、言語についてはさほどしっかりしていないことが翌日わかった。ジョンは顔面全体に憔悴の色濃く、鼻尖部に凍傷を負いやや黒くなっていて、言を極めれば、ミイラの一步手前のような印象を受けた。ほとんど自発的に言葉を発せず、時折うなるような声をあげるのみであった。ただこれは全面的に体力の消耗によるのではなく、かなり強力な鎮痛剤の服用による薬理作用にもよるものであった。コンロを流され水を作れぬ、といった状況から察しても、あるいは彼らの顔貌から見ても、極度の脱水状態にあるのは明白だから、ただちに水分(ジュース、スープなど)を与えた。惜しむらくは、このような状況のためにせっかく日本から運んで来た輸液瓶をBCに置いてきていることだ。ジョンの状態では、経口摂取より点滴静注の方がずっと良いことは、医学上の常識だからだ。ハワードは立て続けにジュース類を2000ccも飲んだようだ。水を溶かすのが間に

合わぬほどだ。心配なジョンも、わずかずつながら水分摂取をしてくれた。一段落着いたあと、私は、骨折しているとダグが言っていた左下肢を診察した。ズボンの上からもそれとわかる変形を認める。膝よりやや上の大腿骨下端部に変形がある。少なくとも大腿骨側の骨折はあるだろう。場合によっては、脛骨(すねの骨)の骨折もあるかも知れない。ただ膝関節そのものは良さそうだった。もう一つ幸いなことに皮膚は破れていない、つまり開放性骨折ではなかった。開放性だと、雪の上のような寒冷な環境ならまだしも、あの暑く不潔な帰路で感染は必至とせざるを得ない。そこまで考えたあと、とにかく骨折の整復をしようと思った。整復こそが局所の皮膚、足趾の血行等を改善させる最も良い方法であるからだ。思い切って力一杯足の方へ牽引を加えつつ、整復を試みるが、痛みによる防御的な筋肉の収縮のためか、ほとんど整復されぬ。整復は受傷直後が最も容易で、一週間もすれば軟部組織がべたっと貼りついてしまって非常に困難になる。彼の場合まだ3〜4日だ、できぬわけではない、と思い直し、再度、再々度試みるも、苦痛と筋の防御収縮を招くのみで効を奏せず、無麻酔下での整復は無理と考え、やむなくそのままの位置で副木を当てて固定することにした。荷箱として使われていたプラスチックの箱の側面を3つ折にして足首から大腿まで当て、ガム・テープで固定する。プラスチックだからガッチリとまではいかぬが、まあ役には立ってくれた。こうしておいてその間も水分摂取を主として全身の状態改善を待ち、苦労して作ったにわか仕立てのスノー・ボートにジョンを乗せて、テントサイトを後にしたのはそこに着いた翌々日だった。ジョンは移送中痛みのため、顔をゆがめることも数度あったが、よく耐え、時には冗談を言うこともあった。意識状態は完全に回復し、むしろハワードを気遣うゆとりさえ見せた。そのハワードはダグにかかえられ、一応独歩の状態だったが、時々休んでも自分の方から何も言わず、うつろに空を見ているだけだった。途中困難なスノー・ブリッジも突破し、ポーター諸君に彼らを委ねる所まで来て、我々の救出・処置・移送は終わった。ただジョンの脚に対する医学的処置は、これから本格的になされねばならぬ。彼はラワルペンディの、そことしては一応大きな病院で治療を受け始めた。私が後れてラワルペンディに着き、彼を見舞った時、骨折はすでに麻酔下に整復され、受傷部の皮膚が一部壊死に陥り、それに対する小手術が行われていたが、手術場の控え室の壁はじめついでいて、むかでのような虫がいるのには驚いた。これでは手術で感染を招く危険すらある。幸い、そのすぐあと、彼は帰国の途に着いた。ハワードはその後徐々に回復し、時々笑うようにもなった。こちらはもっぱら自分の回復力によるしかない。別れるころには、アメリカ人には珍しい沈黙考型の男と、よく言えば、そう言える程度に回復した。

今この文を書いているのは、山から帰って数カ月を経ており、しだいに記憶もうすれた。気候、風土、人間性、すべてが異質と思える場所での体験もしだいにうすれ、日常性の中で何となく不満足な毎日を送っている。時々、青黒いまでの空と、それへ伸びるチョゴリサの稜線を思い出そう。強制されたものでない苦労の中にこそ、精神の豊饒が宿るのだと思える事が、最大の収穫だ。



(左側上より)

C 4

C 4

C 4より左に、リンク・サール、右にK 6を望む

C 4よりC 5への荷上げ

(右側上より)

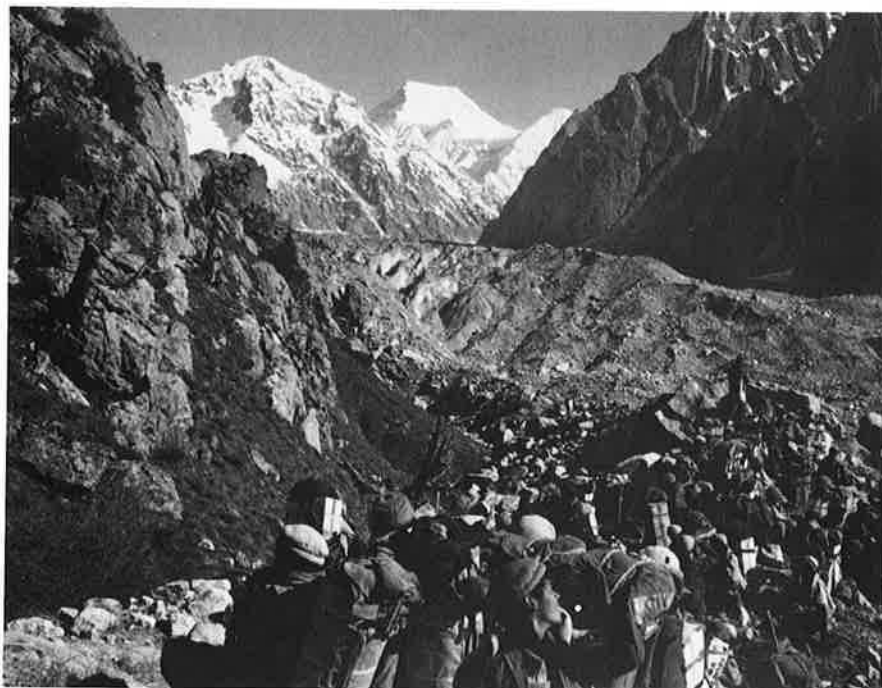
背負子とプラパール・ボックスで作った急ごしらえの担架

救助作業

ポーターに背負われるウィッドメイヤー

救助作業





辺り一面、岩屑の墓場としか表現しようのない茫漠の世界だった。確かに昨日から我々を魅了しているリンク・サールの白い姿や、コンダス氷河の遠く奥に輝くシルバー・スローンの存在も否定はできない。しかし、それはこの岩屑の限らない堆積に比べたら、ほんのお茶を濁す程度のものでしかない。鑿で穿ち、鉋で削り取ったような垂直の壁の廊下の中を、黒い岩石のヴェールで覆われた氷河が波を打って赤茶けた山裾に落ち込んでいく。廊下の側壁は飽くまでも高く、手のつけようのないツルツルに磨かれた摩天楼となって聳えているし、氷河の波は砂漠の砂丘のそのように我々の進行を遅々とさせ、その波の頂上に立てば、まるで北極海の荒波を航くトロール船の乗組員になったような感じさえたのである。

山岳地帯での撮影、特に山それ自体を被写体とする場合、広角レンズはその機能を最大に発揮してくれる。東京を飛び立つ前、私はいままでの経験から、望遠レンズを一切捨てて広角レンズ一本に的を絞ったのである。特にカラコルムのような広大でかつ巨大な山の集積に対しては、画像を精々歪めない程度に出来る限り多くのもの、より広範囲の風景を収穫しなければならない、という基本的方針のもとに機材を考えた。そしてこの考えは的を得ていた。

いま、ポーター達が氷の海原のうねりの中を蟻のように隊列を成して進んで行く。リンク・サールの頂から懸垂氷河がカベリ氷河に落ち込んできて、我々の頭上を脅かす。想像を超えたスケールの風景が小さなファインダーの中に凝縮され集積されている。ファインダーからはみ出してしまう部分は、アングルを少し変えて無理にでも押し込もうなどと、へたくそな考えはやめて、あっさり消去してしまえばいい。次のこまで撮ればよい。時間はたっぷりあるのだから——これが大きな誤ちであったことに気が付く頃、私は帰途の飛行機の中であった。

今日がキャラヴァン最終日、すなわちベース・キャンプ設営予定地に到着する日ということもあって、隊員初めポーター達の顔にはどこかしら嬉しさを漂わせていた。今日こそ、チョゴリサ初見参である。

私は隊の写真撮影担当を仰せつかっていた。いわゆる報道写真として、朝日新聞に掲載のための写真原稿を定期的に撮影する仕事である。私は自分に与えられた仕事の最も大切な瞬間である一コマを、あと数時間の後に迎えようとしていた。

カベリ氷河は、コンダス氷河を分岐して、それ自体は大きく西方へ左折する。屈折する部分は全体的に少し盛り上がり、特に内側になる程複雑に波が交錯して、刃物で抉ったような大きな傷口を幾つも開けていた。ルートは右岸沿いに高巻を開始し、時には心細くなる程の急登があり、ほんの申し訳程度についた小径に、無数の小石を崩しながら長蛇の列が続く。

私は最後尾にいた。別に息苦しくはなかったが、何となく足が重く感じられた。あと数メートル登れば高巻の最高点に達し、コーナーの向う側へ出られるという所で、列は動きを止めた。眼の前にはポーターの汚ない尻があった。おそらくこのパキスタン服は、バザールで購入した時から一度も洗濯したことがないのではないか。しかも彼等はパンツを穿かない民族だから、このズボンはきつと汗とナニとで汚れているに違いない。私はそんなことを想いながら待っていた。随分と永く感じた時間であったが、実際には1、2分のことだったかもしれない。ともかく、残りの数メートルを克服すればチョゴリサが見えるはずである。

列は動き出した。ポーター達の鈍い動作に多少苛立ちながら、ずり落ちないようにしっかりと運動靴で急斜面を踏みつけた。

突然、遠くの方から——それはコーナーの向う側に消えていった先頭集団の方から——コールが懸かった。

「見えたぞーっ」

今思えば、まるで映画の台本の如くとして付けたような言葉だったが、なぜかその時は胸を締め付けられる思いを感じる程の感動的な言葉だったように憶えている。

歩みが速くなって、前に行くポーターの尻に衝突しながら、ようやくコーナーの最上部を乗り切った。

カベリ氷河はさらにえんえんと続いていた。表面の肌は相変わらず荒々しく醜い様相を見せていたし、両側の岩壁は以前にも増して天を突く尖塔となって屹立していたが、しかしそれはもう驚愕する程の威圧感はなかった。そして、氷河が遠く山並みの中へ吸い込まれていく所、紺碧の空の中央に、そのチョゴリサは真白き肌を我々の眼前に惜し気もなくさらけ出していたのだった。

私はすぐ仕事にかかった。レンズのキャップを外しファインダーを覗く。茶褐色の壁が両側から迫って来ているが、広い空と純白のチョゴリサの邪魔にはならない。実に堂々と威風を凝らし、辺りの山々を従えるように聳え立っている。その部分だけが別の世界だった。

丁寧にかつ慎重にシャッター・ボタンを押し続けた。ポーター達も見入っている。恐らくもう二度とない瞬間を経験していた。



チョゴリサ南壁

キャラヴァンの開始地点であるスルモ村は、シャヨック川の畔にある。シャヨック川は、カラコルムの氷河に端を発してインダス川に合流する。地形のせいで、夕暮れになると決まってすさまじい砂嵐がやってくる。上流から吹き下ろされた風が、河原の砂を舞い上げるのだ。たちまちのうちに鼻の穴から爪の先まで砂だらけになる。テントのおずかなすき間さえ見逃さない。ただでさえパサパサのパキスタン米が砂粒でガリガリだ。だれもが「えらいとこ来てしもうた」といった顔付きである。

いよいよキャラヴァン開始。総勢90名。準備のできたポーターから三々五々歩き出す。私も先頭集団につく。すごい速さである。彼らの荷物は隊荷が25kg、それに自分達の食糧、衣類が5kgとして、少なくとも30kgは担いでいるはずだ。このままもつかな、と思いつつ一諸に走っていると、果して10分もしないうちに全員座りこんでしまった。ところが今度は1分もせずにもた走り出す。同じことを何度か繰り返して、やっとこれが彼らのペース配分だと気付いた。我々もしばらく真似して走っていたが、そのうちアホらしくなってやめた。

2日目の昼休み、ハルディという村で後続を待っていると、村の暇そうな男たちが、たいそう立派な笛や太鼓を持って集まってきた。どうやらダンスを始めるらしい。最初はポーターが順に踊っていたが、そのうち隊長がけしかけられてやり始めた。阿波踊りと秋田音頭をチャンポンしたようなやつだ。それでもやってくる本人は意外に真面目に取り組んでいる。そのうち私の順になってやってみたが、慣れないせいかりズムに乗り切れない。やってるうちに真面目になり、顔がひきつって来たので途中でやめてしまった。

楽しく過ごすうちにキャラヴァンは進み、8日の後BCに到着した。はるか彼方に屋根の形をした山が見える。チョゴリサを見分けるのは、日本で富士山を見分けるよりも容易だった。しかし、そこにルートを見つけ出すのは少しも容易に

は思えなかった。我々の登山期間は45日間である。その期間内で果して登頂できるか。天候は今のところ申し分ない。このまま晴天が続けば、そこから活路が開けるはずであった。

BCへ到着した当日、ほとんどのポーターは解雇し、ハイ・ポーターとして10名を採用した。この中には、真面目さと体力を買われた「朴訥派」、隊員を自分の村へ招待して歓心を買った「要領派」、前年の遠征隊の推薦を受けていた「コネ派」、などが互いに対立していた。

これらのポーターたちと共に偵察と荷上げを繰り返し、2週間の後、C3を高度約5000mに建設した。アイス・フォールの下部に位置し、目指す南西峰を真上に見上げる場所である。以後、このキャンプが事実上のベースになり、休養キャンプとして、あるいは食糧、装備の集積場所として使われた。場所的には、南西峰に頭を押さえつけられたような気がした。

当面の課題をアイス・フォールの突破に絞ることにした。アイス・フォール上のルートについては、初登のオーストリア隊の記録にも詳しく述べていないので、我々としては、手当たり次第に偵察を重ねていくことにした。しかし、日を追う毎に見通しは暗くなるばかりであった。あらゆる方面から、手を変え、品を変えて試みても最後は巨大なクレヴァスにぶち当たった。

嘆きと落胆が諦めが変わる頃、南稜への迂回ルートが見つかった。クレヴァスは相変わらず多いが、我々の慎重さを持ってすればどうということはない。前途は一挙に好転したように見えた。が、この夏、世界を取り巻いた異常気象はこのカラコルムにもやってきた。青空のもとカラスが飛び交うカベリ氷河は、この頃から急に風雪の日が多くなった。

降雪による寒気、雪崩、ラッセルのため、C4から上部へのフィックス・ロープは全く伸びず、低迷を続けた。雪に埋もれたフィックス・ロープを掘り起こすのに、同じ労力を二度も三度も要した。それでもめげずに頑張り、居心地の悪い、ヨレヨレのC5が作られたのは7月も後半にさしかかっていた。予定された登山期間もあと数日となり、食糧も底が見え始めていた。我々はとりあえずC4に集まって、これからの方針を練ることにした。これまでの最高到達点はC5の6500m、頂上まであと1000m余りである。残された食糧はわずか5日分であった。我々の力量を過信しても、C5から上部の核心部を乗り切って頂上に立つには相当な覚悟が必要だった。

7月19日、悲壮感が漂うC4の未明、寄せ集めた5日分の食糧を持って、隊員5名は最終アタックへ向かった。登山開始から数えてすでに43日間を過ぎていた。昨日来の雪でフィックス・ロープは雪に埋もれているため、トップはそれを掘り起こしながら進んで行かねばならない。その上、ユマールの歯止めには雪が詰まって空回りする。その度に息を吹きかけ、ピッケルでたたいて雪を落とさなければならぬ。気が遠くなりそうだ。

夕方5時、目指すC5まであと200mの高度だ。ここで何度目かの大休止、そして何度目かの定時交信。C4から吹き上げる風雪に混って、アメリカ隊遭難の報せが飛び込んできた。何としてでもチョゴリサの頂上に立とうと頑張ってきた僕の登山行為にも、これで終止符が打たれた。

“視覚化”を拒否する風景

波多野 哲朗

切り取りようもない風景　パキスタン領カシミールもずっと中印国境に近いバルティスタン地方に至ると、その驚異的な風景に親しもうとして訪れた外国旅行者たちは、一様に軽い失望を味わう。一つにはインダス川の支流をはさんで屹立する高山が迫り過ぎ、カメラによる風景の展望が許されないからである。それに色彩は褐色一色、風景のみならず家々も人びとの服装もこの劃一的な色調の中に沈んできわだつことがない。

私もたまたま従軍カメラマンのような役割をになってチョゴリサ登山隊に加わっていただけに、この切り取りようもない風景に閉口してしまった。人間にカメラを向けようとしても、人口の半分を占めるはずの女性はほとんど姿を現さず、たとえ現れたにしてもカメラを見ればすぐに隠れてしまう。

異なる文脈の上に配置　しかし一見何の変哲もないかに見えたこの世界も、そこで過ごされる時間のなかで実に豊かな起伏を示しはじめる。夕陽が落ちて暗闇が訪れると、あちこちの家々で始まる朗々たるコーランの詠唱は、やがて村全体を包み山々にこだまする。闇を透かして眺めていると、村人が大樹の下で大地にひれ伏し、また立ちあがってはひれ伏すという祈りを果てしなく繰り返している。どんなに貧しい部落にも、日に必ずや一度はこの充実した時間が訪れる。しかしこの豊かな闇の中での起伏を「見る」ことは出来ないし、ましてや写し撮ることは全く不可能に近い。

時おり草花で帽子を飾っている男たちに出会うことがある。はじめてヴィジュアライズされたこの変化に喜んで、私は早速シャッターを切る。あるいは砂漠のようなガレキの平原を終日歩き続けた果てに出喰わすオアシスのあざやかな緑。それは決まってポプラと杏の樹々によって織りなされた西洋庭園を思わせる緑だった。この美しい光景も私たちの目を愉ませる。だがこれらのこの上なく視覚的に見えた事物や光景が、いずれも全く異なった文脈の上に配置されていることに間もなく気付くのである。実は男たちが頭につけていた草花はいずれも強い芳香を発するものばかりで、彼らは飾るというよりはむしろ香料としてそれをつけていたのだった。

そしてオアシスのポプラは、さし木による増殖の容易さと、もっとも早く成長して燃料として確保されるがゆえに植えられていたのであり、杏の木は激しい温度差に耐えて乏しい水量で育ち、その実はもとより種子から採れる油が住民たちの必需品であるために植えられていたのだった。私は予想だにしなかった文脈の存在を知って驚く。

自力で建て替えられる　だが驚くだけで事は済みそうにない。それはこの驚きが、計らずも私たちの文化の視覚的偏向性とでも呼ぶべき在りようを照らし出してしまうからであった。このことは単にカメラを持っていたという私の個人的理由にのみ還元し尽せるレヴェルの問題ではあるまい。少々大げさな言い方になるが、私をも包み込み私をしてカメラを持たしめているような日本の文化の一向性を逆に対象化するのだった。私たちは視覚的に世界を了解しようとする文化を、あたかも空気のように呼吸し

ていたのだ。

この土地の褐色の家々のほとんどは、日干しレンガで造られている。決して長年ほつことのないこれらの家々は、あたかも崩壊を期待しているかのようだ。でも家はすぐさま自力で建て替えられる。石材の乏しい国では決してないが、石に対する執着はない。たまたま石垣などを見かけても、私たちの目にはあまりにもずさんに崩れ易く見える。というよりもこれらの建造物は、はじめから恒久的であることを放棄してしまっているかのようだ。

インダス川上流の峡谷をジープでさかのぼったとき、人里から数十キロも離れた道路の端に時折数人の男たちを見かける。道路といっても、それは岩石と砂ばかりの急斜面に引かれた1本の細い糸で、一雨あればたちまち土砂によって消えてしまうような道である。この男たちはジープが1台通り過ぎるとそのあとを補修し、雨が降ればたちまち崩れてしまう道筋を広げるために、絶えず山側の土を削り続けているのだった。ただそれだけの目的で1日そこに停まり、しかも毎日この作業を繰り返しているのである。

この気の遠くなるような作業にはあきれてしまう。おそらくこの作業はもう数十年いや数百年の間繰り返されているに違いない。インダス川は氷河が川に変わるその発端から濁流を吹き出し、その水は永久に透明になることはない。つまりカラコルムの自然はすさまじい速度で浸食され続けている。ここでは「賽の河原」も神話ではなくリアリスティックな描写に過ぎないことがたちまち了解される。

ただこうした人間の営みを、貧しさあるいは非文化と呼ぶことは出来ない。ギリシアでは同じ石を積み上げ、私たちが今日「造形的」と呼ぶ文化の様式を築き上げ、その恒久性・普遍性の故に西洋文化の源流とされてきたのであったが、この西アジアでは、あえてその恒久性・普遍性をつき崩しながら独自の文化を築いてきたのだった。

いや「築く」という言葉さえここでは適当ではないだろう。こうした文化は絶えず時間へと解消され続けるが、これもまた文化と呼ばずして何と呼べるだろうか。立体的造形性を拒むかのように果てしなく織り縫い続けられる絨毯や刺繍からモスクの壁画や装飾に至るまで、完結する造形性を嫌う彼らのイスラーム文化は、ほとんど無限に横へ横へと平面的に広がっていく。それらはたしかに見えるものではあるが、私たちが言う意味での視覚的造形性とはほど遠いものである。

ところで、こうした文化の在りようは、世界を視覚還元的に捉えようとする私文化消費者という立場たちの認識態度を裏切らずにはおかない。たしかにいま私たちが呼吸する極度に視覚化された文化様式も、もっぱら文化の消費者という立場を強いられた大衆のぎりぎりの世界共有の仕方だと言えないことはない。なぜなら視覚化は、あるレベルで事物の意味を多様化し膨張させるからである。しかし世界の一隅で、この種の「視覚化」を拒否する文化様式が、いまなおはるかに多数の人々によって受け継がれている。私たちは、この種の文化の在りようを、思考から排除してはならないのだと思う。

アメリカからの来信



FOUNDED 1902

THE AMERICAN ALPINE CLUB

113 EAST 90TH STREET · NEW YORK, N. Y. 10028 USA · 212 722-1623 · CABLE: ALPINECLUB

T. C. PRICE ZIMMERMANN, PRESIDENT
 c/o DAVIDSON COLLEGE
 DAVIDSON, NORTH CAROLINA 28036
 June 23, 1981

Mr. Shunsuke Tamura
 23-8-3-chome Kichijoji
 Higashi-cho
 Masashino-shi
 Tokyo, Japan

Dear Mr. Tamura:

Mr. H. Adams Carter has told me that you and your companions gave up your chances of reaching the southwest peak of Chogolisa in order to participate in a rescue of injured climbers on an expedition led by Doug Cannalte. This is mountaineering conduct of the highest order, and I want to convey to you the gratitude and thanks of the American Alpine Club for your splendid gesture in assisting the injured American climbers to descend. Had you not done so, they would certainly have perished.

With every expression of thanks, and with warmest regards,

Yours sincerely,

TCPZ:na

cc: Mr. H. Ad-
 Mr.

*Again, thank you
 John W. Zimmerman
 1425 W. 15th AVE
 Van. B.C. Canada
 Post Ca. 12*

Dear Mr. Tamura,
 Many thanks for your help on Chogolisa last July. I am now in the hospital undergoing my operations on my leg. I am putting the money together that we borrowed from your expedition and hope to repay our debt soon.

S. TAMURA
 3-23-8
 Kichijoji Higashi-cho
 Musashino City
 Tokyo, Japan

Stamp: VANCOUVER, BRITISH COLUMBIA
 The "Sprinkling Devil" of Western Canada is breathing bad news
 01-0123-0

パキスタン最北東部に位置するバルティスタンでは、チベット語方言のバルティ語が話されている。1972年のパキスタン政府が行った人口調査によると、バルティスタンの人口は16万2000人とあり、バルティ語の母語人口もほぼこれと同数とみてよいだらう。南東に隣接するインド領ジャンムー・カシミール州のカルギル地区、ラダック地区では、それぞれブリック語⁽²⁾とラダキー語⁽³⁾が使用されている。この2言語は、バルティ語と共に西部チベット語方言群を形成している。中でもバルティ語は最西部で話されており、特に語頭の子音群や語末の子音など、チベット語の原初的な音韻体系を保存する言語としてチベット語方言学研究上、注目されている。

下に掲げる資料は、アジア・アフリカ言語文化研究所編『アジア・アフリカ言語調査票』上巻(1966年)を用いて、1980年6月から7月にかけて、カプルー村のシャー・ジャハーン(女・23歳)をインフォーマントとして行った調査によるものである。1957年生まれ彼女の彼女は、生まれて今日に至るまでずっとカプルーに住んでおり、旧ラージャー(王族)家に嫁いでいる。同村の学校で8年生まで終えたが、ウルドゥー語の読み書きができ、またシナー語とパンジャービー語を若干理解する。

なお、調査者の誤記を最少限に防ぐために、ラジオ・パキスタン・ラワルピンディ局バルティ語班のプロデューサー兼アナウンサーであるシャミーム・バルティスターニー氏に最終的なチェックをしていただいた。

A.F.C.リードによる『バルティ語文法』⁽⁴⁾の巻末には、英語-バルティ語の語彙集が付されており、約2200の単語が収載されているが、筆者の調査結果とはかなり相違していることが判明した。相違点を示すために、(1)リードに収められていない語には(+), (2)リードに収められている語と異なる語には(*), (3)リードに収められている語で表記が異なる語には(**)の印を付ける。

各語彙項目の記載事項は次の通り。

(1)項目番号 (2)日本語 (3)ウルドゥー語⁽⁵⁾ (4)バルティ語

☆ ☆ ☆ ☆

バルティ語の音素体系表は次の通り⁽⁶⁾

[母音] : / a, i, u, e, o /

[子音]

	両唇音	歯音	歯茎音	そり舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
破裂音	/p/ /ph/ /b/	/t/ /th/ /d/		/t/ /th/ /d/		/k/ /kh/ /g/	/q/	
破擦音			/ts/ /tsh/		/c/ /ch/ /j/			
摩擦音	/p/		/s/ /z/		/sh/ /zh/	/x/ /g/		/h/
ふるえ音			/r/	/r/				
側音			/l/					
鼻音	/m/	/n/				/ng/		
半母音	/w/				/y/			

(註1)
詳しくは拙稿 "A Report on the Basic Balti Vocabulary" (「大阪外国語学報 第54号」所収。1981年秋発行予定)を参照されたい。

また最近のバルティ語語彙集として、高橋正治「カラコルムの言語」(『ヒンズークシュ・カラコルム研究誌』pp. 75-113)があるが、バルティ語の音韻体系の無視、ウルドゥー語表記の不統一等々、緻密さに欠けており、利用し難い。

(註2)
Cf. Bailey, T. Grahame: Linguistic Studies from Himalayas. (Royal Asiatic Society Monograph No.18) London, 1920. (Reprint 1975) pp. 1-33.

(註3)
Cf. Koshal, Sanyukta: Ladakhi Grammar. Delhi, 1979.

(註4)
Read, A. F. C.: Balti Grammar. (James G. Forlong Fund Vol. XV, Royal Asiatic Society) London, 1934.

(註5)
ウルドゥー語の表記は簡便化を計り、特に鼻音は省略してある。

(註6)
若干の表記記号の説明をする。

/ph/ /th/ /t/ /kh/ /ch/ /tsh/は/pl/ /t/ /t/ /k/ /cl/ /ts/の帯気音で、かなり強く息を吐き出す。/c/は日本語の「チャ」行の音。/zh/は英語のpleasure, leisureのsに近い音。/p/は/ph/の異音で弱い/t/ /x/ /g/は喉のずっと奥で出す音。/ng/は英語のsingのngに近いが、バルティ語では一音として語頭、語中にも現れる。1

1.	頭	sar /go/	52.	粉	sufuf /phe/
2.	髪の毛	sar ka bāl /goral/+	53.	塩	namak /payu/
3.	額	pēshānī /spalba/	54.	油	tēl /mar/
4.	眉	bhaun /sminma/	55.	酒	sharāb /chang;sharab/
5.	目	ānkh /mik/	56.	タバコ	tambākū /tamak/
6.	涙	ānsū /chima/**	57.	味	zāiqa /brot/**
7.	耳	kān /sna/	58.	匂い	bū /tri/
8.	鼻	nāk /snamsul/	59.	食物	xurāk /zacas;zan/
9.	口	munh /khamcu/*	60.	肉	gōsht /sha/
10.	唇	hōnt /khapaq/*	61.	卵	andā /byabjon/**
11.	舌	zabān /hlce/	62.	にわとり	murgā /byapo/, murgī /bya-ngo/ ciṛiyā /bipu/**
12.	唾	luāb /khachu/+	63.	鳥	pankh /shoqqq/
13.	齒	dānt /so/	64.	羽根	par /byamshoq/*
14.	あご	thōrī /kosko/	65.	羽毛	ghōnslā /tshang/
15.	ほお	gāl /manggal/	66.	巢	cōnc /khamcu/
16.	ひげ	mūnch /snamdal/	67.	くちばし	sīng /rwa/
17.	顔	cehra /gdo/	68.	つの	bail /xlang/, gāe /bang/
18.	首	gardan /zhingma/**	69.	牛	churī /gri/
19.	のど	galā /hrkoxma/	70.	ナイフ	talwār /rai/
20.	肩	kandhā /rostot;xpukhma/	71.	刀	dhār /kha/
21.	背中	pīth /sningkha/	72.	刃	ḍandā /hlṭano/
22.	腰	kamar /sketpa/**	73.	棒	kamān /gzhu/
23.	尻	cūtar /sasna/*	74.	弓	tīr /da/
24.	胸	sīna /brang/	75.	矢	nēza /neza/+
25.	乳房	chātī /cucu/**	77.	糸	dhāgā /skutpa/**
26.	腹	pēt /hltwa/	78.	針	sūī /khap/**
27.	へそ	nāf /hltya/+	79.	衣服	libās /goncas/
28.	腕	bāzū /phraqpa/**	80.	紙	kāgaz /shoqshoq/
29.	ひじ	kohnī /ṭrimong/**	81.	物	cīz /cigang/*
30.	手	bāth /laqpa/	82.	蛇	sānp /gbul/
31.	指	unglī /senmo/	83.	虫	kīrā /strin;habu/
32.	つめ	nāxun /zermo/**	84.	蠅	makkhī /zbyangbu/
33.	足	pāon /kangma/	85.	蚊	macchār /phisho/+
34.	ひざ	ghuṭnā /bukhma/**	86.	のみ	pissū /kishik/*
35.	肝臓	kalējā /chinma/**	87.	しらみ	jūn'en /shik/+
36.	心臓	dil /sning/	88.	あり	cyūntī /kinmoq/
37.	腸	āntēn /rgyuma/	89.	魚	machlī /ngya/
38.	皮ふ	jild;khal /baxspa/	90.	貝	sīpī /tshapor/+
39.	汗	pasīna /xmulchu/	91.	動物	jānwar /byaltshong/**
40.	垢	mail /garut/	92.	獵	shikār /ling/+
41.	うみ	pīp /snaq/	93.	網	jāl /dol/
42.	毛	bāl /ral/	94.	犬	kuttā /khi/
43.	脂肪	carbī /tshil/	95.	綱	rassā /thaqpa/
44.	血	xūn /khraq/	96.	ひも	rassī /thagbu/*
45.	骨	hadḍī /ruspa/	97.	羊	bhēr /lu/
46.	肉	gōsht /sha/	98.	馬	ghōrā /hrta/
47.	体	jism /rgo/	99.	豚	suar /phaq/**
48.	病気	bīmārī /nat/**	100.	しっぽ	dum /zhindo/**
49.	傷	zaxm /hrmakha/**	101.	動物の毛	pashm /bal/
50.	薬	dawā /sman/			
51.	米	cāwal /bras/			

102.	毛皮	khāl /baxspa/	151.	火	āg /me/
103.	袋	thailā /khyalba/**	152.	風	hawā /xlung/**
104.	鍋	dēgci /zangbu/+	153.	雲	bādāl /xnamkhor/*
105.	釜	ketli /kitili/*	154.	霧	kohr /munma/*
106.	かめ	ghārā /bajo/	155.	雨	bārish /charpa/**
107.	つば	ḍongā /---/	156.	雪	barf /kha/
108.	屋根	chat /handoq/	157.	空	āsmañ /xnam/
109.	壁	diwār /rgyang/	158.	虹	dhanak /gza/
110.	窓	khirkī /barban/	159.	太陽	sūraj /ngima/
111.	扉	darwāza /zdo; stago/	160.	月	cānd /lzot/**
112.	家	ghar /nang/	161.	影	sāya /ngimphraq/
113.	車	gārī /moṭor/+	162.	影	sitāra /akarma/
114.	船	jahāz /chui-jahaz/+	163.	日	din /zhaq/
115.	井戸	kuān /chudong/	164.	毎日	har rōz /zhaxtang/**
116.	仕事	kām /las/	165.	週	hafta /hafta/
117.	金銭	paisā /pene; xmul/	166.	月	mahinā /lza/
118.	木	daraxt /stagzhi/**	167.	年	sāl /lo/
119.	幹	tanā /ḍim/*	168.	朝	subah /gyoxpa; gyoxspa/
120.	枝	shāx /zdo; shara/+	169.	昼間	se pahar /nging/*
121.	草	ghās /hrtswa/	170.	夕方	shām /gonphin/
122.	茎	ḍanṭhal /dim/+	171.	夜	rāt /tshan/
123.	根	jaṛ /rampa/	172.	昨日	kal /gunde/
124.	葉	pattā /lo-nga/	173.	明日	kal /bella; haske/
125.	花	phul /mindog/	174.	今日	āj /diring/
126.	実	phal /faxmul; mewa/*	175.	今	ab /dose; alta/
127.	種	bij /son/	176.	いつ	kab /nam/
128.	樹皮	chāl /shumphraq/*	177.	なんじ	kitnē bajē hain? /ci wax songset?/
129.	畑	khēt /zhing/	178.	時間・時	ghanṭā, waqt /wax; namza/
130.	林	daraxtōn ka jhund /stagzhishom/+	179.	一	ēk /cik/
131.	森	jangal /jangal/+	180.	二	dō /ngis/
132.	道	saṛak /lam/	181.	三	tin /xsum/
133.	穴	sūrāx /xong/	182.	四	cār /bzhi/
134.	橋	pul /zamba/	183.	五	pānc /ga/
135.	川	daryā /rgyamtsho/	184.	六	chē /truk/
136.	山	pahār /ri/	185.	七	sāt /bdun/
137.	野原	maidān /ol/+	186.	八	āṭh /bgyat/**
138.	平原	maidān /thang/+	187.	九	nau /rgu/
139.	池	tālāb /rzing/	188.	十	das /p̄cu/**
140.	湖	jhil /tsho/	189.	二十	bis /ngishu/
141.	海	samandar /samandur; tshomondor/	190.	百	sau /bgya/
142.	島	jazira /tshoṭoq/+	191.	いくら	kitnā /tsamtse/
143.	水	pāni /chu/	192.	いくつ	kitnā /tsam/
144.	氷	barf /gang/	193.	半分	ādhā /phet/**
145.	石	paṭṭar /rdwa/+	194.	ぜんぶ	sab /sing; tshangma/
146.	土	miṭṭi /thalba/*	195.	いくらか	kuch /chonci; tsilci/
147.	砂	rēt /byama/	196.	数	adad /hrtsis/+
148.	ほこり	dhul /thaldum/	197.	歳	umr /naso/
149.	煙	chuān /tutpa/**	198.	回	bar /ren/
150.	灰	rākh /thaltsir; thalcit/	199.	夫	shauhar /ashipa; daxpo/
			200.	妻	bivi /chungma/**

バルティスタン概要

麻田 豊

バルティスタンとは パキスタン領カシミールに含まれ、世界第二の高峰K 2をはじめ7000m級の雪山が肩を並べ、北は中国、南はインドに接し、インダス溪谷の石ころだらけの深い谷間に、緑のオアシスが点在している。この地方と「下界」(現地ではこう表現する)のパキスタンを結ぶプロペラ飛行機は、天候次第で簡単に欠航され、ギルギットへ通じるジープ道路(1965年開通)は、土砂崩れで不通になることが多い。乞食もいない。税もない、新聞やコカ・コーラとも無縁の、平和な別天地だ。

ギルギットやチトラール方面とは異なり、外人旅行者が少なく、カシミール紛争も影響して、すべての面で開発が立ち遅れている。だが、そのおかげで、貧しいが安定した生活を営み、チベット文化の影響を受けた独特なバルティ文化が今日でも残っている。

歴史

バルティスタンに足を踏み入れ、初めて探険誌を残したヨーロッパ人は、19世紀初頭、カシミールからギルギットへの道をたどったヴィーニュだった。それ以前のこの地方のようす、文化的背景は詳しい文献がなくはっきりしない。1846年以降、1947年パキスタンの分離独立までは、ドーグラール・ヒンドウーのカシミール藩王国に属していた。当時はもっぱらインダス川沿い、あるいはシャヨック川沿いに東へ伸びる小馬がやっと通れるほどの道をつたって、スリーナガルやラダック地方のレーと結ばれ、交易が行われていた。45歳以上の男達の中には、スリーナガルへ出稼ぎに行ったことのある者、またラダック方面からの行商人を迎えた時のことを覚えている者が少なくない。

バルティスタンの谷の数は7とも11ともいわれ、それを6人のラージャー(地方領主)が統治し、農牧兼業を背景とした宮廷文化が栄えていた。ただし、このラージャー制は1971年ブットー政権により廃止され、現在残る旧ラージャー達は月々2000ルピー(地方の警察長官の給与と同額)の年金を受け取って生活している。

カプルーのラージャーは、周辺の村々からフシェー谷、東の谷を含む広大な領地を治め、謁見のために訪れる村人のために宮殿の台所は24時間火を絶やすことがなかったと聞いた。そのカプルー王宮は、バルティスタンに現存する最も立派な宮殿で、白亜の3階建ての冬の宮殿には70もの部屋がある。だが、140年前に現在の場所に建てられた宮殿は、時代の推移に押され、窓ガラスは割れ、漆喰もはげ、村民の普通の家よりひどい状態にある。

元来バルティスターンには、ボン教、ラマ教が広まっていた（スカルドの北のシガルには、明らかにラマ教寺院だと思われる建築物がイスラーム教寺院として使用されている）。そこへ14世紀半ば、スフラワルディー派のイスラーム神秘集団が700名を率いて西方から布教にやってきた。ある文献によれば、この時だけで4万人が改宗したとか。この時の改宗者はヌール・バクシュ派に属し、特にカプルー地域に集中している。パキスタンではイスラーム・スンニー派が主流であるのに対し、バルティスターンではシーア派信奉者が大多数を占める。スカルドのメイン・ストリートは最近「ホメイニー通り」と改名された。たまたまカプルー滞在中に「アリーの生誕祭」が祝われ、サイヤッド家に招かれた。サイヤッドに属する男女が男部屋と女部屋に分かれて集まり、正面にはホメイニー師と他の宗教家の肖像画が掲げられ、部屋中に花を飾り、パユチャ（塩茶）とアゾック（お菓子）が振舞われ、宗教讃歌を歌い、コーランを読み、2時間ほどで終わった。お祭りというよりは厳粛な宗教集会といった雰囲気だったが、これという娯楽のない村人にとっては、結婚式と並ぶ大きな楽しみなのだ。

私たちがここを訪れる1ヵ月ほど前にイランから特使団が送られ、革命支援要請のキャンペーンを繰り広げて帰った。そんなこともあって、スカルドやカプルーではイスラーム化の傾向が特に強く、歌あり踊りありの盛大な結婚式は減り、ムッラー（聖職者）を呼び、コーランを読んで宗教讃歌を歌うだけのごく簡素な式が多くなったと聞いた。また、カプルーで民謡を採集したり、仲良くなった女や子供達の写真を撮ろうとしたが、すべて「イスラーム」の名の元に拒否された。カプルー滞在中、7月半ばからラマザン（断食月）に入ったが、女は12歳、男は15歳からすべての住民が例外なく苦業に励んでいた。ヌール・バクシュ派は掟が厳しく、夜中2時半頃マシッドからのアザーンで起き、朝食を済ませ、日没の7時半頃まで約16時間、飲まず食わずなのだ。今年はちょうど小麦の収穫期と重なり、苦しい日中を避けて、夜中、ケロシン・ランプの灯を頼りに畑で刈り取りに精を出す女達の姿も見られた。

人口9000人、63の部落から成るカプルーは、バルティスターンの東の中心地だ。夕方6時半から10時まで電灯が点り、各部落には一つずつ共同水道の蛇口が引かれている。標高2200mのカプルーでは二毛作が可能で、7月から9月にかけて小麦、大麦、あわ、じゃがいも、トマト、玉ねぎ、ほうれん草、かぶ、その他各種果物（杏、クルミ、桑、リンゴ、ブドウ、スモモ、ナシ）などが収穫される。だが、長い冬には新鮮な野菜、果物など一切手に入らないので、収穫と同時に、トマト、玉ねぎ、杏、桑は夏の強い太陽光線で乾燥させ、じゃがいもも冷暗所に保存される。自然環境に恵まれたカプルーでの生活は安定しており、現金収入も多いらしい。少々でも余裕のある家では部落のバザールに店を出しパンジャープ地方から運ばれた商品を扱っている。最近、客間に椅子を置くことが流行し始め一種のステータス・シンボルになっていると聞いた。パキスタンの大都会に出稼ぎに行く男が多く、ほとんどすべての男がウルドゥー語を話し、男の子の6割が4ヵ所の小学校に通っている。男女の服装、女性の髪型はすっかりパンジャープ風で、カレー料理を毎日食べる家も多く、カプルーを見ている限り、パキスタン

パンジャープ文化と伝統的生活

のどこでも見られる農村の雰囲気とたいして違いないようだ。

一方、カプルーからシャヨック川^{ザク}を筏で渡り、北へ40km、フシェー谷最奥の村フシェー（標高3200m、人口400人）は、バルティスターンの辺境地で、村人の生活は驚くほど貧しい。村の周囲に木々は一本もなく、土砂ばかりの谷を開墾した畑と、わずかの家畜を移畜している。だが、その半面、バルティスターン独自の古い生活様式がここにはそのまま息づいている。夏の間、男たちは登山隊のポーターや道路工事人夫として出稼ぎに行き、村は老人と女、子供だけになる。

大麦の粉とヨーグルトと牛乳とギーを主食とする。農作物は大麦、粟、じゃがいも、豆、「野菜」と呼ばれる正体不明の葉っぱだけ。月に一度、隣村から配給品の小麦粉、砂糖とランプ用のオイルを男達が1日ばかりで担いで運ぶ。

ランプ用のオイルは貴重品で、夜になっても台所のかまどの炎の周囲に家族全員が集まって時を過ごす。飲料水専用の水などなく、畑の用水路を流れる土砂の混った水を灌漑、洗濯、炊事、飲料水に使う。この砂混りの水を何十年も飲んでいいため、村人の歯はヤスリをかけたように摩滅している。燃料用の薪は何キロも上流に生えている木を伐採し、男とは限らず女までもが何十キロもの束を担いで村まで運び下ろす。

フシェーでは、ウルドゥー語をたどたどしく話す男が数人しかいなかった。しかしその逆に、チベット文化圏西方一帯に伝わっている「ケサル」の英雄物語を12夜完璧に語り、歌うことのできる中年の男が2人もいて、私達にもその流暢な語り口を得意気に披露してくれた。移牧のための夏村に1週間滞在した時には、仕事の合間に一休みしている女達が、古い子守り歌や民謡、さらに踊りまで教えてくれた。

学校に通うこともない子供達は——フシェーには男子小学校があるが、先生も不在がち、生徒も家の仕事の都合で欠席が多い——煤埃だらけの顔に鼻水を垂らし、服とは名ばかりのワカメのようなボロ布をまとい、いつも陽気に走り回っている。子供でも物心がつき、歩き始めればもう一人前の大人と同じように畑で草むしりをしたり、夏村からヨーグルトを運んだりする。そうは言っても天真爛漫な子供であることには変わりなく、女の子は手伝いの手を休めては集まってバルティスターン版「ズイズイヅッコロバシ」や石ころを使ったお手玉に興じるのだ。

フシェーの女は皆チベット風に長い髪を編み込み、幾本もの長いおさげの先を飾り紐で一つにまとめ、背中から腰にかけてぶら下げている。頭には浅い円錐型の帽子をのせ、結婚式の際に持参金として持ってきた銀の飾り（トゥマール）を帽子一面に付けている。衣服は、シャルワールあるいはチューリーダール・パージャーマーとぶかぶかのスモックのような上着で、下着は一切着けていない。洗濯の習慣がほとんどなく、着のみ着のままが多い。そんな彼女達も「毎日花をつけかえなさい。顔は洗わなくとも頭には花束を」との諺に従って、ピンクの野バラや紫のレンゲを可愛い花束にして帽子に飾る。

たった2ヵ月足らずのカプルー、フシェーでの滞在だったが、「小チベット」と呼ばれるバルティスターンが、パキスタンに編入されて以来、特にパンジャーブ地方との結びつきが強化され、イスラーム色の濃い「近代文明」に同化されていく過程を目の当りにさせられた。

バルティスターンの女たち

麻田 美晴

素朴で、律儀で、屈託のないバルティスターンの女たちの素顔を、特に私がフシェーで親しくなった2人を取り上げて紹介してみたい。

フシェーでは、村人の家に居候させてもらったが、その家に着くやいなや私は女の特権と、台所を見たいと頼んだ。案内された部屋は天井に四角い30cm四方の穴が開いただけの真暗な土間だった。ここで私は、火を焚いていたこの家に居候している親戚のアピー（老婆）の姿を見た。まるで御伽話の魔法使いそっくりなのだ。ボサボサの白髪はもう何ヵ月も洗っていないようだし、煤埃が顔一面の皺の一本一本をなおさら深く見せている。木の枝のように痩せた体を、だぶだぶのバルティ風クルターとチュリーダール・パージャーマーで包んでいる。両方とも紺色の厚い木綿地で作られているが、これまた何ヵ月も着たままなのか、畑の土埃りで白っぽくなっている。靴などはいたことのない小さな足は泥んこで、象の足のようにひび割れている。結膜炎だろうか、目は充血して涙を流してばかりいる。

居候だからか、それとも老人だからか、アピーの行動はまるで影のようで人目につかない。いつ出て行っていつ食事をしたのか、誰も気付かないことが多い。かなり老衰しているので、水汲みや畑を耕したり水を引いたりすることはできない。それでも毎日この家の女達と畑へ出掛けては、子守りをしたり、土の上を這いずり回るようにして草むしりを手伝っている。食事は小麦粉を水で練って焼いたクルバと草（村人は野菜と呼ぶ）の塩茹で、あるいはヨーグルトと粉を混ぜたもの。どんなに勧めても肉や卵は口にしない。じゃがいもカレーを作った時も、汁をチャパティーにつけて食べただけだった。「アピーは断食中なんだ」と家人は説明してくれたが、私には納得いかなかった。贅沢だからと遠慮したのか、それともバルティスターンには元来カレーを食べる習慣がなかったからなのか、最後までこの疑問は解けなかった（この家の主人が子供の頃、出稼ぎから戻った父親が得意気にカレー料理を作って見せてくれたのが初めての経験だったと語っていた）。アピーの好物は塩茶。緑茶を煮出した後、バター、岩塩、羊の乳を混ぜたこの飲み物は、この地方に生きる人々のエネルギー源なのだ。時には、粉を塩茶で練ったものでお腹を満たすこともある。アピーのクルターのポケットには、ひからびた干し杏と杏の仁が数個入っている。バルティスターンの特産品だが、フシェーでは杏が採れないので、これとて貴重なお菓子になる。

6月21日、村人が総出で粟の種蒔きが行われた。移牧しているゾウが12頭も山から連れ戻され、早朝に親戚一同（子供も含めて）が集まり、マール・ザンを食べ、一勢に畑に出る。どの畑からも陽気な声があがり、畑仕事というよりお祭り騒ぎだ。昼食は畑の隅に車座になり、今朝、夏村から運ばれたヨーグルトと粉を食べる。食後には特別にトゴルと言うお菓子まで振舞われた。だが、この日、アピーは食事にも畑にも顔を見せなかった。私は、人気のない村の片端で一人ポツンと子守りをしている姿を見て、厳しい現実を見たような気がした。

真正面にマッシュャブルム峰がそびえるこの谷に生まれ、死んでゆくアピー。もちろんこの村から一歩も外へ出たことはない。「若い頃は何十キロもの薪やバタ

一、ヨーグルトを入れたカゴを背負い、夏村との間を毎日往復したものさ。でももう何年も夏村のドムスムには行ってないね。あそこは木があって水も澄んでいて素晴らしい所だよ」と涙目をしょぼつかせて語ってくれた。夜、焚火を囲み、野菜が煮えるのを待ちながら低い声で子守り歌を口ずさむアピーの隣に座していると、それだけでこの老婆の人生が見えてくるような気がした。

もう一人、フシェーで忘れられない女がいる。村一番の貧乏と村長さんが教えてくれた家族のお母さん、ギャルビーは、がっしりした体に笑みを絶やさず肝っ玉母さんだ。12才の娘ナルギスを頭に、男の子2人、女の子1人を育てている。一番下の息子ハッサンはまだよちよち歩きだ。主人のアリーは、道路工事の出稼ぎで留守だった。

この家族の財産は、羊が5頭と仔牛が1頭そして畑が3枚だけ。何度かお茶に呼ばれたが、ギャルビーが台所と称する土間には申し訳ないほど何もなかった。鍋が2つと茶碗が3つ、お皿が2枚、それに柄杓と水がめ、いつ行っても私の目についたのはそれだけだった。フシェーでは、お客にはリプトン紅茶を使ったミルク・ティーを出すのが最高のもてなしなのだが、この家ではそんな余裕はなく、消えかかった^{おき}織を巧みに吹いて火を起し、鍋の残りの塩茶を温めなおしてくれるのだった。

フシェーの女達は実によく働く。人一倍働き者のギャルビーも、家畜のいる夏村とフシェーの間をほとんど毎日のように往復して仕事に精を出している。朝5時ごろには起き、前日の夕方搾った羊の乳や、一晩かけて作ったヨーグルト、あるいは薪の束をチョロン(背負い籠)に山と積み、夏村からフシェーへ戻る。夏村に一日中留まってバターを攪拌したり、堆肥を少しずつ運び出したりする女たちもいるので、大きな子供達はその手伝いに残して行く。2時間も歩いてフシェーに着くと、簡単な食事を済ませて畑へ出る。ギャルビーの畑は少ないので、頼まれている家の畑へ水を引いたり、耕したり、草むしりをしたり……。こうした手伝いをする事で、刈り取りの時、幾分わけ前がもらえるのだ。高い頂に囲まれたフシェーは、夕日が影を落とすのが早い。2時ごろには畑仕事から戻り、夏村で待っている子供のためにクルバ(円いパン)を焼き、3時ごろには近所の女達と連れだって夏村への道をたどる。往復4時間ほどの道程も日課となるとさして苦にならないのか、チョロンを背負ってスタスタと歩いて行く。チョロンの中では息子のハッサンがスヤスヤと眠っていた。夕方から放牧してある羊が戻ってくるまでの一時がギャルビーにとっては楽しい時間なのだ。焼きたてのクルバを子供達に与えながら、今日一日夏村で何をしてたのか聞いてやる。話の途中にもチョロンに入っているハッサンを取り出して乳房を吸わせてやる。どこでも見られる母親と子供達との関係だった。

バルティスターンでも僻地との評判高いフシェー。その中で一番貧しい家と皆が認めるギャルビー一家だが、普段はそんな生活の疲れなど微塵も見せない。



聞き取り調査



チョロンを背負うバルティスタンの女たち



カプルーの宮殿



乳を吸わせるギャルビー



フシェー村の子供たち



民謡を歌いながらバターやヨーグルトを作る

●国内で
登山許可取得

登山申請書受付は入山の前年の1月からということなので、1978年12月にパキスタン大使館に申請書を提出したが、1月16日以後でないと受け取れないと拒絶され、翌79年1月16日朝一番に再度大使館を訪れ提出。この時の申請は第一希望ガッシャーブルムII峰、第二希望ガッシャーブルムI峰であった。同年夏に3名をパキスタンに派遣して許可取得をプッシュしたが奏功せず、1980年1月に不許可の通知を受けた。急遽転進先を探して大使館経由の電報で再申請し、4候補のうちからチョゴリサ南西峰をカベリ氷河からという許可を2月8日に取得した。

保険

隊員全員が郵便局の簡易生命保険に加入。疾病・傷害特約付きの月掛けの掛捨てで、帰国後すぐに解約した。保険の世話になることなく終了したのは幸いである。

梱包

梱包用カートン・ボックスは寄付を受けたもの、購入したものなど3種類の大きさになってしまったが、1梱包の重さを25kg（ポーターの負荷）にするにはかえって各種の大きさのボックスを使い分けられて便利であった。

現地ではなるべく途中で開梱せずに済むように配慮して梱包したつもりであったが、いざ現地へ行ってみると、予定が変更になったり、その他色々な事情で何度も梱包し直し、リエゾンに“*You are always unpacking and repacking!*”とひやかされていた。おかげで、かなり多目に持って行ったつもりの再梱包用資材が、キャラヴァンを始める前にもう不足をきたす有様であった。

他隊との交流

同時期にカラコルムに入山する在関東の登山隊の代表が定期的に会合を持ち、互いに親睦を図って現地での無用の摩擦を避け、また航空券や装備・食糧を共同購入するなどの便宜を得られた。

●パキスタンで
先発隊

観光省に電話で到着の挨拶をし、面会の約束を取り付け、観光省に出向いて隊荷の無税通関許可願をバックিং・リストと共に提出し、担当官アワン氏のサインを受ける。更にスカルドへのフライト予定を決めてPIAへの便宜供与依頼書を貰う。ブリーフィングの日程も決める。

隊荷の通関は全く問題なく終了し、荷物は一部をホテルに持ち帰り、あとは空港に無料で保管させる事に成功した。この交渉は麻田美晴隊員のウルドゥ語に負うところが大きであった。学術隊が登山隊と別れて独自に行動出来る様に観光省、PTDC（パキスタン観光開発公社）と折衝し内諾を得る。

ブリーフィング

指定された日に観光省に出向いてアワン氏と登山に関する打合せを行う。若くハンサムな連絡将校ナジブ大尉と初顔合わせ。一見お坊っちゃん風。学術隊の件は根廻しが奏功して快諾を得られた。出発直前に参加が決まった波多野隊員の入山許可がまだ下りていないので、スカルドで待機しDC（地方行政官）から受け取るよう指示があった。我々がスカルドへ行った時にはその事をすっかり忘れ

て無許可のまま入山したが、何ら問題にはならなかった。ブリーフィングは麻田夫妻の流暢なウルドゥ語のおかげか非常になごやかにスムーズに進行した。

観光省から紹介されたアルファ保険会社をリエゾン・オフィサーと共に訪れ、彼とポーターの生命保険契約をする。担当者は遠征隊の保険にすっかり慣れており、手続は簡単に終了した。

保険契約

スカルドでは宿舎に予定していたレストハウスが満室で断られ、建築中で内装未完成のK2ホテルにPTDCの好意でただで泊まることが出来た。ケガの功名である。到着の翌日DCの事務所に挨拶に行く。ポーターはすべてカプルーで雇う予定であったが、DCの指示により半数をスカルドで雇用することになり、37名を選んだ。残りの45名はカプルーで雇用した。

スカルド、カプルー

現地購入の食糧はスカルドで買う予定で物資購入許可を貰ったが、運賃を安く上げるためとリエゾンが勝手に気を利かせてカプルーで買わされることになった。カプルーはバザールが小さくて物資が乏しく、物価もスカルドより高いのでメリットはなかったようだ。カプルー郵便局で郵便物受け渡しの打合せをする。

ポーターの賃金は、キャラヴァン出発時に最初の5日分を前払いし、後半の5日分はBC到着後解雇の時に支払った。賃金はパキスタン政府から受け取った登山許可書に示されているが、我々が受け取った賃金表はアスコレ、バルトロ方面のものが記されていたので、カプルー地区でもこれを準用するものと解釈して1日の基本賃金40ルピー、リターン12ルピー、食費15ルピーの条件で契約した。ところがゲントに向かう西独隊がたまたま同じ日に同じ場所からキャラヴァンを始めることになり、彼らの持っていた賃金表によればカプルー地区の賃金は基本賃金35ルピー、リターン10ルピー、食費15ルピーと書いてあり、バルトロより安くなっている。我がリエゾンがそれに合わせろと言うので、せっかく1人分ずつセットしていた紙幣をばらしながら支払った。もっともその方が安上がりになり、ポーターからも苦情は出なかったのが助かった。この点はブリーフィングの際に確認しておけば避けられた問題であった。帰路のキャラヴァンは往路10日(休日を含み)かかった所を3日で歩いたので、本来なら1日に3日分支払わねばならないのであるが、強引にリエゾンを説き伏せて3日で375ルピーで押し切った。

ポーター賃金

登山を終えラワルピンディに戻るとすぐ観光省に電話で連絡し、デブリーフィングの日程を決める。その日にリエゾンと共に観光省に行き登山の経過を説明し了承された。アワン氏はヨーロッパへ出張して不在で、かえって簡単に終わった。これで遠征に関する公式手続はすべて終了した。

デブリーフィング

ブリーフィングの時に、出国の際の外貨持ち出しは1人50米ドル以内と言われていたが、我々は大幅にルピーが余ってしまった。アメリカ銀行に相談に行ったところ、ステート・バンクに申請して許可を貰えばいくらでも換金出来るとのこと。早速行き事情を説明して申請書を提出し、4200ドルの換金許可証を入手し、アメリカ銀行でTCの交付に3日もかかったが、それだけの甲斐はあった。

換金

会 計 報 告

山田昭一・田中静哉

I. 収 入	隊 員 負 担 金	8,360,000円
	寄付等(含現物寄付)	4,455,600
	計	12,815,600円

II. 支 出			外 貨 支 出		
内 貨 支 出			外 貨 支 出		
装 備 費	1,599,357円	滞 在 費	15,717ルピー		
食 糧 費	678,632	装 備 費	2,940		
輸 送・梱 包 費	1,647,480	食 糧 費	7,432		
酸 素・医 療 費	370,880	輸 送 費	35,604		
保 険 料	121,500	交 通 費	5,840		
液 航 費	2,359,200	保 險 料	3,564		
事 務 費	989,030	人 件 費	80,288		
報 告 書 費	750,000	通 信 費	1,006		
雑 費	675,474	雑 費	2,256		
小 計	9,191,553… [Ⓐ]	小 計	154,647ルピー		
		(ルピー=21円)	3,247,587円… ^①		
		登 山 料	1,516ドル		
		(ドル=248円)	376,460円… ^②		
		①+② 合 計	3,624,047円… [Ⓑ]		

Ⓐ + Ⓑ = 12,815,600円

装 備

船井総一

(*は現地購入品)

A-登攀具

品 名	規 格	数 量	単重 g	総重量kg
ザイル	9φ×40m	4	1,900	7.6
	7φ×40m	1	1,470	1.5
	7φ×50m	1	1,500	1.5
フィックスロープ	ノーブレンP/P8φ×200m	12	6,000	72.0
	ナイロン8φ×200m	3	8,170	24.5
	ノーブレンP/P6φ×400m	3	6,500	19.5
スノーバー	35cm	30	145	4.4
	60cm	40	250	10.0
デッドマン		30	285	8.6
アイスピトン	打込み	14	—	2.3
	スクリュー	6	—	0.3
	アングル	7	—	1.2
ロックピトン	短・長	20	—	1.5
カラピナ		40	80	3.2
アイスパイル		4	800	3.2
アイスハンマー		2	650	1.3
旗		80	—	—
旗竿		80	—	—
背負子		7	2,000	14.0
” バンド	ゴム式	14	—	—
酸素ボンベ	K4	5	6,100	30.5
レギュレーター		3	600	1.8
その他付属		—	—	1.4
マスク		6	—	—

B-露営用具

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
ダンロップテントNo.4、5	5～6人用(外張共)	2	6,200	12.4
No.6、7	4人用(")	2	3,700	7.4
高所テントNo.8	エスパース4～5人用	1	4,850	4.9
ライオンテントNo.1	4人用(外張共)	1	3,500	3.5
No.2、3	2～3人用(")	2	2,500	5.0
BCテントNo.9	カマボコ8人用、フライ共	1	9,100	9.1
夏用テントNo.10	SP、4人用	1	—	—
ツェルト	ポール・フレーム・フライ共	2	2,500	5.0
	アタック用本体のみ	1	520	0.5
ベグ	土用、スソドメ	36	25	0.9
	雪用竹ベグ	77	25	1.9
断熱マット	5mm	30	—	—
スコップ	雪用	5	1,040	5.2
ノコギリ	"	5	350	1.8
雪ブラシ		6	80	0.5
テントシューズ		5	—	—
ケロシンランプ*		2	—	—
マントル*	子備	5	—	—
ホヤ*	"	3	—	—
ガスランプ	EPI	2	650	1.3
ローソク	200g	30	200	6.0
ハイビーシート	1750×2210mm 荷物用	5	640	3.2
		1	2,200	2.2

C-燃料・炊事用具(2)

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
まな板	ベニヤ 20cm×30	2	—	—
竹ばし	15膳入	4	130	0.5
スプーン*		20	—	—
フォーク*		20	—	—
ウォーターバッグ	10L	7	200	1.4
モチアミ		2	—	—
茶こし*		3	—	—
ドリッパー		1	80	0.1
ドリッパーペーパー	40枚入	3	70	0.2
ザル	プラスチック 20cm	2	90	0.2
油ひき		1	80	0.1
サランラップ		2	120	0.4
アルミホイル		2	100	0.5
缶切		2	50	0.1
ナイロンタワシ		4	20	0.1
計量カップ		2	20	—
かめのごたワシ		4	—	—
ツマヨウジ		2	40	0.1
クレンザー		2	490	1.0
中性洗剤		3	430	1.3
テルモス	タイガー-BVP-074 0.75ℓ	9	650	5.9
ロールペーパー*		50	—	—
ナタ		1	—	—
ポリ袋 大	雪用	20	—	—

C-燃料、炊事用具(1)

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
ガスコンロ	E P I	4	—	—
カートリッジ	E P I 寒冷地用	55	—	—
石油コンロ	マナスル 126	7	1,000	7.0
ケロシン*		200L	—	—
ポリタンク*	ケロシン用 20ℓ	10	—	—
	# 2ℓ	10	330	3.3
ポンプ	#	1	—	—
じょうご 大	#	2	—	—
小	"	5	—	—
フィルター	" ネル	10	—	—
スィスマタ		20	220	4.4
圧力釜	大	1	—	—
*	#	1	—	—
ナベ*	30cm～	2	—	—
*	25cm	6	—	—
*	20cm	6	—	—
コップェル	HOPE LL	1	—	—
	3～4人用	3	800	2.4
中華ナベ		1	—	—
鉄板*	チャパティ用	1	—	—
食器*	ボール	38	—	—
*	皿	38	—	—
*	カップ	28	—	—
アルミ盆		5	—	—
しゃもじ		2	30	0.1
フライ返し*		2	—	—
おたま*		3	—	—

D-測定器材、電気器具

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
高度計	5,000m	1	140	0.1
	7,000m	1	140	0.1
	9,000m	1	140	0.1
温度計	棒状	3	30	0.1
	最高最低	1	100	0.1
ばね計り	30K	1	—	—
	50K	1	730	0.7
水準器		1	210	0.2
数取器		1	80	0.1
双眼鏡		1	1,440	1.4
巻尺	10m	1	210	0.2
	1.5m	1	40	—
ラジオ		3	800	2.4
カセットレコーダー		4	—	—
カセットテープ	カラテープ	10	70	0.7
	曲入	10	70	0.7
乾電池	単3	500	19	9.5
	# アルカリ	500	19	9.5
トランシーバー 大	RJ-380	2	1,050	1.1
小	RJ-78E	4	350	1.4

E-文具・事務用品

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
便箋	KEOG	6	180	1.1
	タイプ用紙	2	200	0.4
カーボン紙		1	60	0.1
方眼紙	A4 3mm方眼	5	220	2.2
ノート	B5 大学ノート	40	150	6.0
出納帳		1	200	0.4
封筒	B4	30	20	0.6
	AIR MAIL	50	3	0.6
ホッチキス		2	90	0.2
# 針		11	20	0.2
ファイル		—	120	1.2
スケッチブック		2	350	0.7
集計用紙	B4	1	230	0.2
	A4	2	200	0.4
はさみ		2	70	0.1
カッター		3	20	0.1
千枚通し		1	20	—
鉛筆	2B ダース	5	110	0.6
サインペン	ダース プラスチックペン	11	130	0.3
ボールペン	# 黒2、赤1	40	20	0.8
マジックインク	大 黒6 赤6	12	60	1.2
	小 黒5 赤5	10	40	0.8
消ゴム		5	10	0.1
セロテープ		1	60	0.2
輪ゴムのり	箱	1	120	0.1
		2	70	0.1
セメダイン		3	30	0.1
定規		2	20	—
原稿用紙	B5・50枚綴	5	160	0.6
鉛筆削		5	20	0.1
スタンプ台	赤・黒	2	80	0.2
便箋	B5	7	130	1.3

F-工具・修理具・予備品

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
プライヤ	大	1	210	0.2
	小	3	130	0.4
ドライバーセット		1	200	0.2
ヤスリ		1	60	0.1
モンキレンチ		1	250	0.3
金ノコ刃		1	50	0.1
針金		適	—	—
あて布		適	—	—
木綿糸	#30 白・黒・赤	#		} 0.1
絹糸	#	#		
ボタン	予備各種	#		
ビニールテープ		10	50	0.5
保革油		1	260	0.3
ガスランプマントル	予備	18	—	—
# ホヤ	#	4	—	—
ピッケル	#	1	780	0.8
アイゼン	#	1	610	0.6
アイゼンバンド	#	3	150	0.5
シュラフ	#	4	1,030	4.1
クレモナロープ	6φ×200m	1	4,500	4.5
ナイロンロープ	3.7φ×303m	1	2,700	2.7
	2φ×200m	1	580	0.6
テントフレーム	予備(ダンロップ)	6	—	—
	#(エスパーズ)	4	—	—

品名	規格	数量	単重 g	総重量 kg
テントポール	180cm	2	550	1.1
ラジオベンチ		4	180	0.7
ベニヤカッター		1	100	0.1
針セット		1	30	—
ゴムヒモ	20m	1	100	0.1
ニップル		15	—	—
皮バッキン		14	—	—

G-雑品・その他

品名	規格	数量	単重 g	総重量 kg
マッチ	小箱	200	8	1.6
ライター		200	10	2.0
蚊取線香*		5	—	—
洗たくバサミ		60	4	0.2
金庫*	ティンボックス	1	—	—
山岳会旗	大	1	—	—
	小	2	—	—
日章旗		1	—	—
パキスタン国旗		1	—	—
シェーバー		2	—	—
コインボリ		1	—	—
ダルマ		1	—	—
爪切		1	20	—
とげ抜き		1	—	—
耳かき		2	—	—
ポケットティッシュ		100	6	0.6
鏡		1	40	—
娯楽用品	紙マージャン	1	—	—
	トランプ	2	—	—
	花札	1	—	—
ガム・テープ		20	—	—
洗たく石ケン		10	200	2.0
容器	タッパ 大	1	210	0.2
	小	2	120	0.2
ポリ袋 大		30	—	—
小		500	—	—
P/Pバンド		適	—	—
ストッパー		#	—	—

H-支給品(1) LO. SP-SPECIAL PORTER

品名	規格	数量			単重 g	総重量 kg
		LO	SP	計		
羽毛服		1		1	1,000	1.0
オーバーヤッケ	ナイロン	1	4	5	350	1.8
オーバーズボン	#	1		1	320	0.3
オーバーミトン	#	1		1	130	0.1
手袋	ウール	1		1	100	0.5
くつ下	ナイロン	2	4	6	40	0.4
	アクリルパイル	2	4	6	60	0.6
	ウール	1		1	100	0.1
長ズボン		1	4	5	380	1.9
トレーニングパンツ	ジャージ	1		1	350	0.4
スポーツシャツ		1		1	550	0.6
アンダーシャツ	アクリル	1	4	5	300	1.5
ズボン下	#	1	4	5	300	1.5
帽子	ウール	1	4	5	80	0.4
セーター	#	1	4	5	300	1.5
サングラス		1		1	50	—
ゴーグル		1		1	50	—
ポリタンク	I L	1	4	5	200	1.0
シュラフ	化繊	1	4	5	1,600	8.0

品名	規格	数量			単重g	総重量kg
		L O	S P	計		
背負子	L Oバックフレーム	1	4	5	2,000	4.0
ヘッドランプ		1		1	200	0.2
ピッケル	バンド付	1		1	800	0.8
アイゼン	#	1		1	1,150	1.2
登山靴		1		1	2,300	2.3
キャラバンシューズ			4	4	2,000	8.0
ジョッキングシューズ		1		1	800	0.8
ロングスパッツ		1		1	200	0.2
エアーマット		1		1	500	0.5
断熱マット	切れはし		4	4	—	—
ゼルプスト		1		1	280	0.3
電池	単 1	6		6	105	0.6
	単 3	16		16	19	0.3

H-支給品(2) LP-LOW PORTER

品名	規格	数量	単重g	総重量kg
サングラス		110	50	5.5
軍手		110	40	4.4
くつ下	ナイロン	100	40	4.0
	アクリルパイル	120	60	7.2
シート	ハイビー 1.8×2.0m	20	640	12.8
雨具	ビニール	100	—	—
マッチ*	1箱/週	240	—	—
(タバコ)*	10本/日	1,200	—	—
ナップザック	メールランナー用	1	200	0.2
運動靴	#	1	600	0.6
雨具	#	1	300	0.3
#	ヘッドポーター用	1	300	0.3

個人装備—キャラバン—(*印はそのままBC以上に共通して利用)

品名	数量	単重g	総重量kg	備考
シュラフ*	1	1,600	1,600	
シュラフシート	1	200	200	シュラフカバーよりbetter、綿素材、低所にて使用
エアマット*	1	1,000	1,000	断熱マット可
運動靴	1	850	850	
靴下	3	100	300	運動靴用ソックス
ズボン	2	400	800	夏用、ジャージートレパンbetter
半ズボン	1	300	300	
綿肌着	3	100	300	
パンツ	5	80	400	
半袖シャツ	2	250	500	綿素材ならば肌着不要
長袖シャツ	1	400	400	綿素材
セーター*	1	500	500	
ジャンパー	1	350	350	雨具可
帽子	1	100	100	
サンダル	1	130	130	現地購入可
サングラス	1	35	35	
ヘッドランプ*	1	180	180	
ナイフ*	1	80	80	カン切り付
磁石*	1	30	30	
時計*	1	—	—	
手帳*	1	—	—	
タオル	2	—	—	
洗面用具	1	—	—	
石けん	2	—	—	現地
シャンプー	1	—	—	
整理袋*	5	—	—	ナイロン袋
小物ケース*	1	—	—	ポリエチレン製箱
ルックザック*	1	—	—	60ℓ程度
水筒	1	300	300	1ℓポリタンク

品名	数量	単重 g	総重量 g	備考
ひげそり	1	150	150	
バッグ*	1	—		個人装備整理用ズタ袋等
ヤッケ	1	450	450	
オーバーズボン	1	400	400	
羽毛服	1	850	850	
羽毛ズボン	1	600	600	or 化繊キルティングズボン
セーター	1	500	500	ウール
スポーツシャツ	1	500	500	#
下着 上	1	400	400	#
下	1	400	400	#
登山ズボン	1	700	700	#
パンツ	1	200	200	#
登山靴	1	2,500	2,500	
靴下	4	130	520	
テントシューズ	1	210	210	
ロングスパッツ	1	200	200	
オーバーシューズ	1	500	500	
アイゼン	1	800	800	
アイゼンケース	1	120	120	
アイゼンバンド	1	100	100	固定式 better
手袋	4	170	680	
オーバー手袋	1	110	110	
羽毛ミトン	1	70	70	なし可
目出帽	1	120	120	or 高所帽
サングラス	1	40	40	
ゴーグル	1	40	40	
ビッケル	1	900	900	
ゼルプスト	1	900	900	
カラヒナ	2	80	160	
コマー	1	400	400	set

食糧

小林俊人

日本より持参の品目リスト

主食	副食	副食・飲物
α米 インスタントラーメン " うどん " そば " 焼そば もち スパゲティ ミートソースの素 ジフィーズ 牛飯 " 鶏飯 " 椎茸飯 " 天井 " きつね丼 即席カレー レトルトカレー カレー粉 (缶入) 即席シチュー レトルト 釜飯の素 " 麻婆豆腐の素 " 五日ずしの素 ソーメン ソーメンのつゆ	ブリンの素 ホットケーキミックス ビスケット クッキー ビーナッツ キャンディー ゼリー チョコレート ようかん せんべい ウエハース みそ 粉末しょう油 だしの素 ソース ケチャップ ジャム マーマレード ティーシュガー 塩、こしょう ねりわさび	スープの素 みそ汁の素 インスタントコーヒー " ココア 紅茶 (ティーパック) 粉末ジュース 玄米茶 ほうじ茶 日本茶 (ティーパック) オパールチン 粉末ミルク スキムミルク 梅こぶ茶 ポッカレモン ウィスキー (缶詰) まぐろフレーク " さんまのかば焼 " やきとり " ゆであづき " みつ豆 " オレンジ

乾燥 混ぜごはんの素 (トリンボロ) (五目) (チキン) (スシ) (コーンピラフ) お茶漬の素 マウンテンハウス チキンシチュー ポテト&ビーフ ビーフ入野菜シチュー ビーンズ&フランクス ビーフシチュー スクランブルエッグ	ねりからし ジフィーズ 卵 ねぎ 漬物各種 佃煮各種 ふりかけ各種 ベーコン ソーセージ 塩コブ	パイン モモ コーヒー豆 マウンテンハウス ビーチ " ストロベリー
---	--	--

現地購入品目リスト

アタ	50kg		カブルー
米	20 "	バスマティ	スカルド
ギー	10 "		カブルー
砂糖	65 "		"
塩	5 "	ハイポーター用	"
ドライミルク	9 "	16Rp/kg	"
ブラックティー	28箱	10Rp/pack	"
グリーンティー		行方不明	ラワルビンディ
ダルチャナ		} ほとんどハイポーターと リエゾン・オフィサーが使用	カブルー
ダル			"
コンディメントパウダー	1 かん	リエゾン・オフィサー用	ラワルビンディ
ポテト	25kg		カブルー
チリ			スカルド
リプトンティー	2	リエゾン・オフィサー用	"
サブジー	} 適	} スカルド滞在中に 使用	"
ムーリー			"
乾燥たまねぎ	10kg		カブルー
コーンフレーク	6 箱	リエゾン・オフィサー用	ラワルビンディ
インスタントコーヒー	1 かん	"	"
バター	6 かん	"	"
はちみつ	3	"	"
ビスケット	18ケース		"
オバルチン	2	"	"
ニワトリ	7 羽		タガス、カルマディン
卵	多数		
山羊	2 頭	ポーター	カルマディン

御協力いただいた方々

(個人・法人、五十音順、敬称略)

秋山宏明
旭通信社大阪支社
(株)アドミレーションセンター
池田常道
(株)泉屋
岩佐浩樹
内海 清
梅田徹昭
エスピー食品(株)
エナロイド(株)
(株)M C A
大藪令子
カゴメ食品(株)
門井照子
神崎忠男
北日本食品工業(株)
木村食品工業(株)
(株)神戸製鋼所
小関恒雄
斉藤良子
坂田 恒
佐藤勝子
サンヨー食品(株)
重利一三
清水食品(株)
昭栄印刷(株)
白井 正
新進食料工業(株)
鈴木郭之
タイガー魔法瓶(株)
(株)大広
高島耕治
田宮みち子
田村秀治
中国新聞大阪支社
築山誠治
帝国産業(株)
東洋水産(株)
豊島英彦
中吉太郎
中島好一
中野勝一
永淵秀夫
中村佳典
新潟大学山の会
日東電気工業(株)
日本光学工業(株)
日本山岳会女子ガルワルヒマラヤ登山隊
日本山岳会チョモランマ登山隊
日本山岳協会

ニッポン食糧(株)
(株)日本ダンロップ
日本輸入食品(株)
(株)パシフィックプロダクツ
浜野吉生
浜谷 統
ハミッド・ミール
平田雅俊
富士写真フィルム(株)
富士食品(株)
藤田友彦
冬広幸子
(有)平和化学工業所
法島義五郎
北海道新聞大阪支社
堀之内佑詰(株)
前田産業(株)
松井弥之助
松尾知子
松尾光剛
松坂屋(株)
松下電器貿易(株)
丸美屋食品工業(株)
丸茂水産(株)
(株)三国屋
三井物産(株)
ミヤコスポート(株)
(株)モンベル
山口博己
吉川創造
吉田八郎
若竹印刷(株)
若西一郎
渡辺彰子

御後援いただいた方々(敬称略)

伊地智善継
山口博恭
南部 博
岡本真佐男
原田統吉
秦 正流
陳 舜臣
司馬遼太郎
俵 萌子
野尻庄蔵
武田暢樹
朝日新聞社
朝日放送

あ と が き

登山は予期せぬ結果に終った。パミール遠征でも、今回の遠征でも我々のすぐそばを登っていた外国隊の遭難事故にかかわり合いを持つことになったが、これも因縁というべきなのだろうか。所期の目的を果すことができなかったのは残念だが、悪天候と雪崩の巢から脱して、全員無事に下山できたことには大自然の神に感謝したい。我々の自然を愛する気持が、今回の遠征を通じて、より一層大きくはぐくまれ、更に新しい自然に対する企みに発展することを祈りたい。また今回の遠征には諸兄諸先輩より多大の御支援を戴いたが心より感謝の意を表したい。もしこの報告書で、我々と共に大自然に接していただけるならば、我々としてもこれにすぐる喜びはない。

編 者

Summary

Chogolisa Attempt—South ridge of the Southwest peak and rescue.

The members of our expedition were Kiyo Saito, Soichi Funai, Shoichi Yamada, Toshihito Kobayashi, Shizuya Tanaka, Tetsuro Hatano, Yoshio Ohta and Shunsuke Tamura as leader. We hired 82 porters at Skardu and Kapalu. We left Sulmo on May 28. On June 5 we placed Base Camp on the Kaberi glacier. Camp III was located at 16,000 feet at the foot of the unclimbed south ridge of the southwest peak of Chogolisa. From that time on the weather became worse. It snowed every other day, and that made our advance very difficult. Camp IV was at 18,200 feet. It was difficult to get to Camp V site because of a lot of snowfall and avalanches. Finally we established Camp V at 21,325 feet on July 15. After making Camp V, we retired to Camp IV to acclimatize. On July 19 five of us were again heading for Camp V for the summit attack. When we got to 20,675 feet, we had an emergency radio from Camp IV, informing us that the American party had met with an avalanche accident on the Austrian route. We decided immediately to go down to save the Americans, though two kept on going up to Camp V to bring down food. The next day we reached Camp III, where two of our members and Cannalte were waiting. Cannalte had come down to Camp III to ask for the rescue. It was not easy for us to advance further due to snowfall, but we could get to the accident spot at two P.M. nextday. Fortunately the two injured climbers were alive, in spite that they had almost had nothing to eat or drink for five days. Our doctor Ohta tended them. After oneday's rest we carried the injured down to our Camp III through the icefall. At that time our food stock did not allow us a second attempt.

Expedition to Chogolisa
from Kaberi glacier
June~August 1980

Osaka Gaikokugo University
Karakorum expedition

発行者

大阪外国語大学カラコルム学術登山遠征隊

〒111 東京都台東区柳橋 1-30-3 パシフィック・プロダクツ気付 tel 03(863)1501

編集者

田村 俊介

太田 泰明

発行日

1982年 4月30日